

北海道の古峯神社

——北海道の神社の人類学的研究(五)——

梅原達治

序

神社は、今でこそ立派だが、最初、棒ぐいを以て、留真沢の入口に建立した。それは、大正七年頃まで続いたようである。

入殖当時の家屋は、草小屋のためか、二年位で建てかえねばならなかった。大木に棹をかけた堀立小屋で、悪いのになると、十月とは持たなかつたのである。片づける時は簡単で、焼いて終つたそうである。シナ(注二)の木(注一)の皮を縄の代用とし、棹は、赤玉、榆(注二)の木をよく使用したものである。

る。(浦幌町、八二五頁)ここに述べられているように、開拓地には神社はもちろん居住家屋すら満足なものではなかつた。さらに日々の食糧にもことかきながらも、まずそれらの困難に耐えて、在来の貧弱な農具類によつて日夜開墾に従事したのが当時の一般開拓移民の入植初期の生活といえよう。

さて、現在開拓期の農民の労働の象徴として鋤があげられている。しかし、現実に土地を耕し種を播く前になさなければならぬことがあつた。それは農地とすべき場所に立ちあはだかる原始林の巨木を伐採除去することである。すなわち、鋤をうちおろす前に斧が必要であつた。たとえば「音威子府村史」の巻頭二編の冒頭の一節ずつをみてみよう。

村史発刊にあたって

明治三十七年に、この地に初めて開拓の鋤が振りおろされて以来七十有余年、……

村史発刊を祝して

これは明治三〇年、福井県より渡道、同三二年、浦幌町留真に入地し草小屋を建てて開墾に着手した川端梅吉氏の回顧談の一節であ

音威子府村に初めて開拓の斧が振られてから七十二年の歴史を経た今日、…

(傍点ともに引用者)

このように、斧もまた鋏とともに開拓の象徴とされているものの、鋏よりも斧よりも、また鋸よりも鎌よりも偉大な力を発揮したものの存在を忘れることはできない。それは「火」である。古くつた草小屋は焼いて処分された。これと同様に農耕の障害物である木や林——当時、樹木は開墾の敵である(遠別町、五五三頁)とみなされてきた——はおしげもなく焼かれ、それを見てよく燃えるといつて喜んだ(遠別町、三五頁)り、焼くのが手柄(愛別町、二〇一頁)とばかり、焼くことをきそつた(置戸町、九八頁)。

このように火に依存する方法が濫用されれば、火の逸出も少なからず生ずるのも当然であろう。野火はいたるところにおきた。そして開拓地が国境を越えて来た山火におそわれることも稀ではなかった。開拓民は火の絶大な力を利用するとともに、その恐怖にさらされていたといえよう。「斧」と「鋏」が開拓の労働の象徴とするならば、「火」と「煙」は開拓と開拓地の象徴といえよう。

山を焼く煙は天にうづまきて春の日光の国がぎりなし

ふりさけて曇れる空かところどころ野をやく煙に日はかがやきて

山谷集

と土屋文明は狩勝峠をよんでいる(島木他、二三〇頁)。

しかし、たとえば蘭越町の狭間小太郎氏は、

昔の開墾は木をきる、それをササといつしよに焼く、種をまく、とりいれる。という順で、わき目もふらず、ただただ働きとお

したので、いわばノコ、ナタ、カマ、クワの四つで開墾したことになるます。

と語られている。(蘭越町、一〇〇頁)たしかに、開墾にあたり、火の力を利用したことは認識されているものの、現実には手にふれることのできる四種の道具によつて開墾がおこなわれたような結論が導き出されている。道具と火の使用は全人類共通であり、人類を他の動物と識別する一標徴ではあるが、道具とは異なり、その使用については、明確な取り扱いをうけず、火と北海道開拓との関係についてあまりまとまつた論考はみられないようである。

本稿において、筆者は北海道の開拓事情のなかの火と関係のある部分をやや詳細に述べ、そのような状況において、野火を天災とあきらめた開拓民が神がみを奉斎した資料を蒐集し、要因と展開について分析をおこない問題の提起をこころみた。

注

一 シナの木、赤玉、榆の木は、それぞれ、シナノキ *Tilia japonica*, アカタモ、(ハルニレ) *Ulmus daurica* var. *japonica*, オコノエ *Ulmus laciniata* のことと思われる。

二 現在、北海道は、渡島、桧山、後志、石狩、空知、上川、留萌、宗谷、網走、根室、釧路、十勝、日高、胆振の一四地方にわけられるのが普通であるが、かつては渡島国、後志国、石狩国、天塩国、北見国、胆振国、日高国、十勝国、釧路国、根室国および千島国にわけられており、現在でも鶴川町と門別町の町界(支庁界)を日胆国境と呼ぶこともある。

つぎの文章の国境も日高と胆振の国境をさすものであろう(占冠村、七〇七—八頁)。

日高から国境を越して来た山火事では国有林が何百町歩も焼けた。日高峠から双珠別を焼きアリサラツブの小瀬宅附近でとまつたが、峠附近から見える三角山頂上の火の勢いは空前絶後、もう見る事が出来まい。

高い木の梢から梢に焰が走るかと思うと一面火の海で煙の中がただ「ごうごう」と音をたてていた。

また、白滝村の白滝神社には、社宝としてつぎの記録が残されている（白滝村、三四〇頁）。

大正六年五月二十三日国境附近ヨリ山火起リ午前九時頃ヨリ西南ノ風強ク土砂ヲ飛シ、風ト共ニ火ノ海トナリ、四・五丁モ先ニ飛移ル火勢ハ実ニ慘憺タリ、其レガ為、上白滝市街除ク外、白滝原野家屋草木全部焼失シ悉ク焦土ニ帰セリ、本道及ビ内地各県ヨリ義捐金ヲ贈ラルル、村ノ補助及ビ陛下ノ御下賜金等アリテ、貧民漸ク飢エ凌グ、是レヲ白滝ノ大火ト称ス。

三

斎藤茂吉も石泉に山火事の跡をよんでいる。

小駅のトイカンベツのあたりより山火事の跡すでに見えをる
なだらかに起伏し海にいたるまで北見の山の焼け果てしあと

この二首は昭和七年上川町安足間より稚内に向かう途中、車窓を通して茂吉の目に映じた光景を詠んだものである。

（斎藤茂吉、四三四頁）

また、本稿において述べる事情は樺太においても同様だったのか、同書にはつぎの歌もある（同、四三七―四〇頁）。

真岡

山火事の煙のために空暗くその時午後三時には灯つけしと

まもり来しわがまぼろしは無くなりつ樺太のやま火に燃えしかば
心の歎きなどいふことの度を越えぬ山に燃えたる火のあとを見て

豊原

汽車中の話樺太神社旧市街農場ロシア人墓地山火事

第一章 火と神がみ

明治の末期から火災が多発したので、大正二年に美瑛町有志が現神居一条十丁目に天照皇太神を主神とする神居火の神神社を創祀した。（旭川市、四六九頁）

開拓民が尋常な手段では、自らの生命財産などを火の魔手から防ぐことができないと感じたとき、とくに超自然的存在に加護を求めるのが日本人の通例であつた。神居においては「火の神神社」ととききなれない社号の神社が誕生している。一般には防火・鎮火の神社としては秋葉神社・愛宕神社などが知られている。本稿において、そのような神徳の神社のなから古峯神社を標題として選んだが、そこに特殊な理由があるからではない。しいていえば、開拓期に勧請された神社のなかで、同社が多少とも優勢な分布を示しているかとも感じられたからである。

さて、北海道では、どのような神がまつられてきたかをみることにしよう。

此ゑらまちのたれといふもの、あらたに家作ればやけ、また、にるむろつくりしければ三日四日、あるいは三月、よつき、あるは三とせ、四とせをへて、火のために、ほろびけることのあやう、けんぎどもの集て、いのりしけれども、そのしるしもなうやけ、れば、つちまつりといふこととしてけるとて、けがれたる土ほりうがちすて、きよげなるつちを山よりうつしてん

皇御孫命波豐原水穗國手安國止平
所知食止天下所寄奉志時亦事寄奉志天
都詞太詞事以申又神伊佐奈伎伊佐奈
美乃命妹背三柱嫁繼給國能八十國鳴能
八十鳴乎生給比八百万神等乎生給比麻奈
弟乎又結神生給比養保止破曉石隱坐
夜七日晝七日吾乎見給比曾吾奈妹乃命
止申給比又此七日自亦給比不足隱坐事寄止見

神紀

二七

却止宣東文屬寸部載橫乃時兜文部進此
諸諸皇天上帝三極大君日月星辰八方諸神
司命司籍左東王父右西王母五方五帝四時
四氣攝以祿人諸除禍災捧以金刀請延帝祚
呪曰東至扶桑西至震淵南至炎北至弱水
千城百國精治万歳万歳
鎮天原神留皇親神漏敷神漏美能命持
高天原

神紀

二七

水神水神壇山姫川菜持氏鎮奉礼事 悟谷又依此 稱許許見奉者 皇御孫能朝廷 御心一速比 給波志 為進物波明妙照妙和 妙荒妙五物手備奉 青海原尔住物者 御 廣物廣物 飲物飲物 與津海菜尔至 万 酒者酒者 應高知應腹浦雙 和稻荒稻 尔至 万 如横山置高成天津祝詞乃太祝詞事以 稱許許見奉 止申

所行復時火 生給密 御保止手 所燒坐又 是時尔 吾名妹 乃命能 吾手 見給布 奈止申手 吾手 見阿波多志給比津止申給或 吾名妹 能 命波 上津國手 所知食惜志 吾波下津國手 所知 止申或 石密 給或 興義津故坂尔至 坐或 所思 食久吾名妹 能所知食上津國尔心 惡子 生置或 來奴宣或 返坐或 更生子水神壇 川菜 壇山姫四種物 手生給或 此能心惡子 乃心荒

図1 鎮火祭祝詞 一神祇神名記 上

と、ほりにほりければ、うちふしにふしたりける人のしかばねの、木のくちたるやうにてありけり。此ほねとつちとをあつめて、柴火にやきて灰となしをさめ、あととぶらひ、みずきやういのりをしてより、ゆめ、火のわざはひのなけん。むかしのなへ、つなみなどにとられ、しにふせる人にてやあらんと。

これは、菅江真澄がえみしのさえきに記した江差町江良町の洪福山泉竜院主の言葉であり、天明九年頃の松前地方の習俗の一端をうかがわせるものである（内田武志他、一七頁）。

さて神社神道においては

○火難除けの神 火産霊神 火神、水波能売神 水神、埴山比咩神 土神。延喜式鎮火祭の祝詞に出て居る神です。此外に、匏神、

（天吉葛神）、河菜姫神をも併せ祀る。

と記されている（神道研究会、二四五頁）ように火難除けの神は神話に典拠していることがうかがえる（図一）。

また、

○防火神

火産霊神 迦具土神 埴山姫神

秋葉神社（静岡県） 愛宕神社（京都市）

とも記載されている（梅田、付七〇頁）ように、神社としては、秋葉神社、愛宕神社が知られている。

市川十郎の蝦夷実地検考録、箱館の部に

一 神明宮 神明町の上にある：

末社住吉大明神一社：天満宮一社：秋葉大権現一社 軻遇突智命を祀る以上文化四年丁卯年草創也

と秋葉大権現の名がみられる（市川一）。

また、芦別市辺溪では開拓火入れで度々民家が焼けるため、火の神である秋葉大明神を祀つたという。（野花南、八一頁）

これら秋葉神社の本社は、静岡県周智郡春野町領家にあり、「秋葉山本宮秋葉神社」と号している。同社の案内によれば、ふるくは火の神の鎮まります火の神の社という意味で「岐陞（キヘ）のはの神の社」とよばれ、中世には両部神道の影響を受け「秋葉大権現」と称し、明治以降「秋葉神社」と称えるようになった。祭神は火之迦具土大神であるが、元来山そのものを火防神の鎮座する神体として崇敬していた。和銅二年元明天皇のつぎの御製を機に社殿が建立されたと伝えられている。

あなたふと阿岐波の山にましますこの日の本の火防ぎの神

祭神の神徳は「火の幸を恵み、悪しき火を鎮め、諸々の災いを祓うものとされている。また、火の神の山として、ここにはいろいろの神事しきたりが残されている。

毎年一二月一六日の夜半、三名の禰宜が古伝の剣、弓、火の三舞を演ずる。とりわけ火の舞は本殿の神火から移した松火を持つて舞うもので「秋葉の火まつり」として有名である。

また、ここに永仁二年信州戸穂の三尺坊という真言系修験が仕え、のちには像に刻まれ祀られるようになったが、明治五年、鎮火の神でなく、人の霊であるから仏例でまつるようにとの教部省の指示があり、別当寺の所属となった。

なお三尺坊以来ここに奉仕するようになった修験は、戦国時代には軍使、隠密となつた。徳川幕府はこれを敬遠し、社に十万石の格

式を与えてその統領を城下に移し、留守に漕洞宗の僧を入れて別当とした。その居住は大登山霊雲院で、俗に秋葉寺といわれたが、明治六年廃寺となり、仏体仏具は可垂斎に移されたという。

また、愛宕神社については福山秘府 諸社年譜並境内堂社部卷之十二につきの記事がある(北海道庁2、一〇八頁)。

一愛宕山権現社 (朱)「安永七年マデ二百三十一年也。永禄七年

ニハ西山ノ麓ニ移転シタルアランカ。実

ハ天文十七年戊申造立ナリ。」

瀬宜 宮

本

永禄七子年松前西方山ノ麓ニ造営。

寛文五巳年三月造替。

元禄五申年八月修理。

宝永三戌年二月造替。

市川十郎も蝦夷実地検査録に熊野三社の末社として、天文四年勧請の愛宕明神を記しているが、おそらく同一のものであろう。(市川2) また、おなじ蝦夷実地検査録箱館の部にも愛宕大明神(祭神軻遇突智命也)のやや詳細な記載がみられる(市川1)。

箱館八幡宮の撰社にて愛宕山にあり本社拝殿鳥居二基社地方五十五間三千廿五坪往昔は無火神社と称し河野加賀守創建と云伝ふ近世八幡宮の杜人の庶族菊池靱負同左近同守之進社務を司り明和六巳丑年再営寛政度より菊池大蔵の家にて管す嘉永二巳酉年再造恒祭六月鎮火祭正五九月火防神事公庁にて鎮火幣帛神酒を受らる

この記載はきわめて明確に愛宕社の性格を示している。なおこの社は、明治一四年村社住吉神社に合祀されたとされている(函館区、七六〇頁)(注五を参照)。

また昭和四年、興部町北興に愛宕神社が奉祀され、爾来火防せの神として、毎年八月一日盛大な祭がおこなわれているという(興部町、六七頁)。

これらの本社は、京都市右京区嵯峨愛宕町にある愛宕神社である。愛宕神社発行の略記によれば、愛宕山は海拔九二四メートル、山城第一の高山で、大宝年中役の小角が泰澄とともに開山したもので丹波との国境に跨っている。

愛宕神社は天応元年、和氣清磨が光仁天皇の勅を奉じ王城鎮護の神として創祀したとつたえられている。

祭神は本殿伊邪冉尊(伊勢大神の母神)をはじめ、埴山姫命(土ノ神)、天熊人命(稲司ノ神)稚産日命(生産水ノ神)、豊受姫命(五穀ノ神)の五柱、若宮、迦俱槌命(火皇産霊神)雷神、破無神(土ノ神)の三柱、奥宮には大国主命外十六柱の神である。

伊邪冉尊は伊邪諾尊とともに、万物を支配する神がみを生成された産霊の神である。しかし迦俱槌命を生まれてなくなれたが、土ノ神水ノ神に火ノ神が荒びられたら鎮め給へといわれた。このために本殿には水土の神などを、若宮には迦俱槌命などをまつり、広大無辺の神徳をあらわしている。迦俱槌命は火を司り、光を熱で万物を活動させ、生々化育させる広く厚い神徳を具へ、火が燃える様な、勇猛熾烈な神である。

このような理由で、愛宕大神は、防火鎮火の神であることは云う

までもなく、何事にも発展繁栄開運勝利の神で、昔から開運厄除祈願（図二）で格別の靈驗を示すが、一面火を粗末にしたり邪心をもつと神徳に副わず、家財生命をも失うことになる。

このようなことから桓武天皇平安寛都の昔から都の乾に鎮座する護国鎮火の神として朝廷の崇敬も厚く、永徳元年には極位の神階を授けられた。一般国民の信仰も厚く、日参月参などが行なわれ、とくに伊勢参宮の折にはかならず愛宕社に参詣する習慣があり、「お伊勢七度熊野へ三度愛宕様へは月参り」とうたわれた。



図2 愛宕大神御守

また東京の愛宕山ほか全国に分社が八百社以上もあるといわれ、愛宕燈籠の存在でもその靈驗を国民がうけいれているといえる。

つぎの記述は地蔵菩薩と本地垂迹思想についての説明の一部であるが、愛宕神社の性格とその伝播について有益なものであるので引用したい（真鍋1、一八五―七頁）。

昭和の今日では大京都市の管内に含まれてゐる愛宕神社は、麗峰愛宕山頂にあつて府社に列せられてゐるが、もとは愛宕郡（おたきのこほり）鷹ヶ峰の地にあつたものを、後に今の山嶺に移し祀つたもので、清和天皇の貞観六年の頃には神位を従五位下に叙せられ、それより間もなく仏者修験道者が山に入るに

及んで、神仏混淆して本地垂迹説が出来上り、今の若宮の御祭神であらせらるる迦具槌命（軻遇突智神）——日本の神話に於ける火の神で、伊弉諾尊・伊弉冉尊の御子——は地蔵菩薩の垂迹であらせらるるとして、別堂に本地仏の地蔵菩薩を安置するやうになり、これを尊信帰依すれば必ず勝利が得られるといふので、朝廷をはじめ奉り、とりわけ武家の信仰を聚め、新しく起つた勝軍地蔵の尊号は、武家の興隆と共に次第に広く信念せらるるやうになつた。またこの山に支那の五台山に模して愛宕五峯を定めたことなどによつて仏者の間には頗る著聞するやうになり、「日本法華驗記」及び「今昔物語」などに見らるゝ通り、奈良東大寺の僧仁鏡などは愛太子山は地蔵及び竜樹の久住利生の所と信じ、昼夜に「法華經」を讀誦し、六時に懺法を行つたのであつた。

ところで今日愛宕神社に参詣する人々が、大方は火を守り給へと祭神に祈念するのは、既ちこの迦具槌命の御冥助御加護を念ずるものであつて、明治維新に神は神、仏は仏と、廃仏毀釈、神仏分離が行はれたるにもか、はらず、今もなほこの神社だけは神に捧ぐべき木である筈の櫛を用いず、仏に奉るべき木である櫛を使用してゐることは、参拝する私たちに奇異の感を懐かしめるものであるが、思へばこれこそ明瞭な本地垂迹、神仏混淆のなごりであらう。……

……而して京都の愛宕神社が勧請分祀せられて出来たる各地の愛宕神社に於いても亦この地蔵菩薩を本地として祭つてゐるのであり、例へば日光二荒山神社新宮の後山にあつた天狗堂も、

本尊は愛宕権現であつたと言へば、本地はやはり勝軍地藏尊を祀つてゐたものであつたらうと考へられ、磐城国石城郡の愛宕神社は言ふも更なり、東北地方に多き庭渡神社の本地仏も亦地藏菩薩であると言はれてゐる。

青森県においても、慶長一五年、弘前築城以降元和年中にかけて、城下に寺社があつめられた。このとき弘前近在に真言五山、天台四山が鎮座されて国土安全を期したということであるが、その真言の一寺愛宕山橋雲寺は愛宕様で通つてゐる。これは領内寺社の惣録所として重きをなすようになった最勝院の眼尊のすすめにより、津輕為信が勝軍地藏を信仰して利益を得たため、慶長七年京都より勧請し、橋雲寺を別当にしたものである（小館、一七一―八一頁）。

またこの地方では辰巳の一代守本尊が愛宕様（勝軍地藏）とされておゐり、これに対する関心はかなり高かつたものと考えられる（同、二二二頁）。

北海道においても松前町松前に地藏院を別当とする勝軍地藏堂があつた。（北海道庁2、一〇七頁）これを松前年歴捷徑で補われた福山秘府年歴部卷之二によつてみると武田家の在立をおびやかする事變のつづくさなかの天文七年「造立將軍地藏堂於松前北山。」となつてゐる。武田家の悲願のあらわれといえよう。

この造営以後、松前に火災のある前には、かならずこの北山が鳴動したと伝えられている（松前町、一五頁）。

以上述べた秋葉神社と愛宕神社は、とくに防火神の中心的位置を占めるものである。しかし、全国的に分布しているとはいえないかもしれないが、北海道においては、けつして両者におとらない分布

を示すものに古峯神社がある。この本社は栃木県鹿沼市草久にある。同社の案内書によりその由緒と神徳を見よう（古峯神社、一一二頁）。

古峯神社の由緒

当神社は、古峯（ふるみね）神社と申し、御祭神には日本武尊をお祀り致しております。

今から凡そ千数百年前、尊の臣下であつた藤原隼人という方が、尊の御威徳を慕いつつ、京都よりこの古峯ヶ原（こぶがはら）の浄地に遷座申し上げたのが始めといわれております。

その後、古峯ヶ原は、日光を開かれた勝道上人の修行の場となり、上人は古峯の大神の御神威によつて、大日光開発の偉業を成しとげられました。

この縁起にもとづき、弘仁十一年・嵯峨天皇の御代に、日光四本滝寺・満願寺・滝尾寺等が弘法大師の執奏により、天下泰平の祈願所として定められてからは、日光金山二十六院八十坊の増坊達は、勝道上人の修行にあやかつて、交替で古峯ヶ原に登山、深山巴の宿で祈願を込め、修行する慣わしとなり、その修行は明治維新に至るまで、千余年の永きに亘つて行なわれました。

明治初年の太政官布告により、神仏分離が行なわれましたので、仏具一切取り除き、純然たる古峯神社となり、現在に至つております。

御祭神と御神徳

日本武尊（別名 小碓命 倭男具那命）は、第十二代景行天皇の皇子で、幼少より身心共に人並外れて勝れ、天皇の命令を



図3 古峯神社神符

受け、国民一人びとりの幸福と平和を願いつつ、関東一円は基より、国家統一に大きな業績を遺し、寄与なされた神様であります。

御神徳と致しましては、日本の国づくりに寄与されたおり、いろいろな難にあわれましたが、いつも御神威によつて除かれました。

別でも、焼津の火難を除かれた故事により、火防の神として、全国より絶大な信仰を仰ぎ、走水海では、海神の怒りを鎮め奉った故事により、海上安全の神として、又大漁満足、或は五穀

豊穰の神として、昔から今日に至るまで、農村・漁村の人々達に熱烈なる信仰を集めております。

このように、人智人力のおよばない処に、古峯の大神の彌高い御神威が得られるとされ、国家安泰は基より、家内安全、商売繁昌、交通安全(図三)・当病平癒・身体健全などの、総べての心願成就の神として、現在では、一般の信仰を仰ぐ的となりました。

古峯神社は藤原隼人の後裔である石原家の個人の邸内に祀つた神であり、石原家が日光修験に深い関係をもちながら存続し、次第に民衆に根をおろし、現在のように深くひろく支持されるようになったのは明治四〇年代のことと推定されている(栃木県、一〇―八頁)。

神徳についてさきにふれたが、神符はつぎの六種がある(同、二頁)。

- 一 講中安全
- 二 家内安全御祈禱御祓
- 三 家内安全 難盗難除剣先祓
- 四 鎮火祭火災消除切札祓
- 五 五穀豊穰嵐除虫除切札祓
- 六 蚕安全御守護

この古峯ヶ原信仰は、関東・東北一円に膨大な講組織をもち、その信仰圏は北海道・信越地方におよび、公称講社やく一万、講員やく三五万をほこるといわれる(同、八頁)。

この信仰が優勢になった要因は、修験の火伏せの行法・信仰を、

神社の祭神の信仰に巧妙につなぎとめることに成功したことにあ
る。つまり、火防せ道場の空白地域である関東・東北地方をひかえ、
火伏せの行法を祭神の故事と結合させた点が強調されている（同、
三五頁）。

さて、これまで代表的な火防神社三社について述べたが、北海道
神社誌（以下、本誌を出典としたものは、頁数のみを記した）の社
名一覧を通覧した場合、その名の見出せるのは、桧山郡上ノ国町の
扇石と桂岡にある二社の愛宕神社のみである。しかし、本文を精読
する場合、函館市元町の船魂神社が愛宕神社を合祀した（一七頁）
との記述がみられるほか、栗山町御園神社が日本武尊を（六六頁）
奉祀していることなどが知られる。これらの祭神がどのような神格
をもつものであるか、すべてが明確にされているわけではないが、
釧路市米町の厳島神社の祭神、火之迦具土命（一五〇頁）は秋葉大
神を奉斎したものであり（釧路市、三四一頁）、また富良野市東山の
東山神社の祭神、日本武尊（八五頁）は古峯神社の分祀であること
（富良野市、四一三頁）が知られている。

幌延町幌延字ウブシの幌延神社について「明治三六年四月 木村
藤太郎、有志に諮り、伊勢神宮に参詣、大宮司に請願して天照大神、
軻遇突智神、保食神の分霊を受け、五月、ウブシ東二線北四号二七
番地に祠を建設。」と記されている（幌延町、七三二頁）。これにつ
いて、同町よりつぎの補足説明が寄せられている（幌延町文書）。

幌延町の草分けは明治三二年であり、その拓殖は農業者の移
住に重きをおいてきた。

農業者は、それぞれ部落が形成されると、小学校と神社の建

設を部落第一の事業としてとり上げた形跡がある。

幌延町は御承知のとおり寒令の地であつたので、農業者は自
家食糧の確保さえ至難であつたといわれる。

また農家の開墾は概ね焼畑開墾（原野の草木を刈り払いして
火をつけて焼き払い、そのあとに畦を立てて作物を播種した。）
を行なつたが、風などによつて飛火して山林や人家に被害を与
えた（当時の農家の屋根は殆んどが草葺であつた。）。

以上のような状況であつたから

軻遇突智神（火の守護神）

保食神（五穀豊饒の神）

を祀つたものと思われる。

当別の奉遷者は存命しないので理由はわからない。

また、札幌市北区屯田町の江南神社の祭神日本武尊については「日
本武尊は、御剣をもつて国難を除せ給ふ武の守護神」であり、武運
長久を願つて屯田村の神社に奉祭されたものであることが記されて
おり（篠路、四二頁）古峯神社との直接の関係はなさそうである。

以上、代表的三社について、北海道における分祀状況もまじえて
述べたが、本稿の末尾に多少とも防火、鎮火と関係のあると思われ
る神社、講社等の一覧表を付しておいた。今後、その整備・検討を
進めたい。

注

一 火の神について、つぎのように述べられている（宮田他、一二一
頁）。

火の特性である照ることと燃えることから、火は人間の生活のシンボルとなり、火の歴史にも長い変遷がある。しかし、我が国においては、火そのものを崇拜するというよりも、火を管理する神を祀ることが一般的である。火の神信仰の発現はほぼ次の三つに大別できよう。①家々の火所に祀られる竈神信仰、②火を焚くことが祭りの中心となつてゐる火祭、③火を統御する神の性格を反映した火伏せ信仰の三つに大別できよう。竈神は荒神・土公神と呼ばれることが一般的であるが、沖縄では文字どおりヒヌカン（火の神）と呼ばれている。：

荒神について、北海道においても火神として信仰されていたようであり、明治四年の祭神改め、社名改称にさいし、江差地方では、不動社を荒神大明神、祭神火産靈神と改称させたという（武田）。

また、大成町字太田の太田神社の記録に秋葉山不動明王を祀るとあるとのことである（会田私信）。

「大成村の歩み」の文政年間の項に「太田山大権現に不動明王外二神の銅像を安置す（浜田村の人 山田助右エ門）」とあるものは、これと関係があるものかもしれない（大成村）。

二 秋葉山について、紀伊国名所図会（二、一三）はつぎのように記している（物集他、一八七頁）。

夫、遠州周知郡、犬居村山峰にしづまります大登山秋葉寺の来由をたづぬるに、元正天皇の御宇、養老二年、僧正行基大士、諸国巡行のとき、当山にのぼり、老杉を伐りて聖観音、勝軍地藏、十一面大悲の尊容、三軀を彫刻して、天下安全、五穀豊饒のために、仏刹を造建し、これに三仏を安す、鎮守の神は大巳貴命、これを、秋葉権現と称へ奉り、一山守護神三尺坊を、同社に祀る、云々、当社の霊験、しば／＼の中に、第一には、弓箭、刀杖の横難をまぬかれ、第二には、火災焼亡の危急をのぞき、第三には、洪水沉没の難をまもらせたまふ、中古、甲斐国乱妨の軍勢、かの秋葉の社を焼払はん

とて、社頭に、火をかくれども、棟のうへより、白水流れいで鎮火す、今に、社頭の檜皮少しく、火に焦せるところ見えたり、火伏鎮護の神徳、度生化益の方便、海内一円に信敬せずといふことなし、これにより、当山に勧請せしあしたより、遠近をいはず、老若男女、御千度跣足まゐり、塩断、寒垢離、夜籠して、社前に敬礼する人、昼夜絶ゆることなし、

三 同社について、同じ著者は「殊にこの神社では防火のまじないとして、神に榊を供へないで榊を献ずる」と述べている。（真鍋広濟²、一一五頁）榊・榊とともにシキミ *Illicium religiosum*。

また、同書によれば、昭和七年七月七日に、函館市の慈尊寺では、火難死者追悼のため新川尻で地藏流しがおこなわれたとのことである（同2、五〇頁）。

四 現在これは將軍地藏と書かれており、これを祀つた山が將軍山と呼ばれている。これについて、つぎのような伝説が記録されている（北海道庁3、一〇頁）。

：此の地藏尊は甲冑を着てゐる石仏であるが、維新前には地藏堂の中に祀られてゐたもので、今もその跡は残つてゐるが、こゝに奇しき話が残つてゐる。明治元年徳川家脱走兵が海陸から官軍である松前を攻めた。此の時不思議にも將軍山から数千の矢玉が飛来して大に脱走兵を悩したが、衆寡敵せず福山城は落城した。賊兵は福山入城後不思議な矢玉の飛び来つた將軍山を調べたが、將軍地藏の他に何物もなかつたので此の地藏の仕業となし、無惨にも地藏の目を剔り、海中に投げ棄てた。翌年世は平定せられたが、一夜漁夫の網に入つて再び発見せられ、今は八十八ヶ所を古刹阿吽寺に安置し信仰を集めてゐる。

蓮華三昧経によれば、勝軍地藏は、頭には畢竟空寂の冑を戴き、身には随求陀羅尼の鎧を着、金剛智の大刀を佩び、発心修行の幡を標し、悪業煩惱の軍を斬る剣を執つて、左右には掌善掌惡の二童子が侍して

みると説かれ、軍馬に跨つて颯爽たる勇姿をしているのが本体であるという（真鍋2、一一六頁）。

五 箱館の町年寄、蛭子吉蔵（淡斎如水と称す）の「箱館夜話草」も神明宮の秋葉大権現や愛宕大明神にふれている（会田書簡）。この愛宕大明神の部はつぎのようなものである。

愛宕の神は火産靈尊、これ則軻遇突智の神なり。火災を護り玉ふ。是を若宮といふ。奥の院は伊弉冊尊を勧請す。阿当護神託に曰、衆生つねに世界の火をけがし、をのれ耆人のおもひをふくみ、天にさかひ地にそかんものは我つねに火乱神をつかはして其不浄を焼ほろぼさん。上はゆたかに、下くるしまん時は火の雨を殿舎に降らし、上の室をちらしてくるしみのものに与へん。

水按に、この託宣といふものも、おそらくは僧侶の書しものなるべし。神は何ぞ凡慮の人をにくんで其人の家を焼すつの理あらんや。然れども又靈験あらたかなる神にまじ／＼けるとて、所司代板倉周防守にも常に信仰して、諸人の訴へを裁断するには必ず此神に誓ひを立しとの事なり。

また、愛宕社は明治四〇年の大火後、船魂神社に合祀され、函館区史にある住吉神社への合祀はまちがいであると思われる。現在愛宕社の手水鉢が船魂神社境内にある（会田私信）（図四）。



図4 手水鉢 ←船魂神社境内(函館市元町)→ 弾丸は函館山要塞時の大砲のもの。
会田金吾氏の御好意による。

第二章 開 墾

開墾ということは野山に火を入れることだと子供のころは思っていた。毎日毎日どこかの山で煙の出てない日はなかった。夜になるとそれは赤い炎となつて山々の影にくつきりと写し出す印象が今でも目に映る。私の仕事として学校から帰つてくると、火をつけることであつた。毎日倒木や笹に火を付けた。

仁木町、丸谷浅次郎氏

「もちろん当初のころは火防線などきつて火入れをしなかったの
で、他の人のところまで延焼してしまう。それでお互に喜ぶというわけである。国有林にも燃えうつて連日の山火事にもなるが、当時はお上もあまりうるさくも言わなかったという。そのように山火事は開墾につきものだつた。」と仁木町史は丸谷氏の談話を補足している。(仁木町、一三九頁)。つまり、火入れと山火事は北海道の開墾と開拓地周辺にはつきものであり、開墾とは火入れであり、野火がともなつた。このことは北海道では常識であり、内地一般とはまったく異なつた情景がみられたものと思われる。「一丈もの熊がいて人間を喰うそうだ。又小便をしている中に凍る……」というのが明治四〇年ごろの内地の人の北海道観の一例であるが、渡道して直面した困難は熊と寒さだけではなかつた(天塩町、二七二―二三頁)。

この頃、最も困つたものに蚊や蛇、ブヨがある。これらが群をなして人間を攻めたてるので、手足は膨れ、顔を包まねばならなかつた。それでも色々工夫してボロ布を縄にない、それに火をつけ、いわゆる火縄にして腰につり下げて防除の一助とした。だが、この位では余り効果もなく蚊、蛇、ブヨのために尊い血を吸われ、熊以上に移住者を悩ました。熊も相当に出没した。夜等も蕨戸の傍まで来て中を覗いたりする事も度々で、その度にガンガンをたたいたりして大騒ぎをした。昼、畑へ出るときも男のいるときはよいが、何か用で外出した時等は、女の人は仕事にならず、鳥の音にも驚き、夕方迄二坪位の開墾がせいぜいだつた。又この頃は鳥もいなかった。たまにどこから飛んで来て木にとまると、移住者達も郷里を思い出し、なつかしがり、羽のある鳥がうらやましく、泣いた女の人もあつたという。開拓移民は、これらの予期されていた困難だけでなく、予想もできなかったような災難がふりかかり、その一つ一つを克服しなければならなかつた。予期していたか、どうか不明ではあるが、山火と場所によつては、出火はきわめて大きな損害を開拓民にあたえていたのである。

本章では、その山火や野火をとまう開墾について述べることにする。

開拓者は屯田兵、農場の小作人、団員というように異なつた組織に属して入地したり、あるいは、個人で入植したり、場所により、時代により、また入地の季節により、またそれぞれの知識・経験などによつて異なるのは当然であらうが、いずれにせよ新しい農地を

つくり出すわけである。まずその状況の一例を引用しよう。明治四〇年代前半の例である（音威子府村、一三四頁）。

…まず陰になる樹木を伐り倒し、熊笹などを長柄の鎌で刈り払い、乾いてからこれを山のように堆積して焼き払い、丸鋸で作条だけして種子を蒔いて収穫した。その後は笹や草の根を掘り起こし、邪魔になる木の根を鋸や斧で切り、伐根を除去して、馬耕ができるまでには数年を要したという。また焼き払った原野に畦を切らずに、種子を蒔くところだけ掘る壺蒔きの方法も多かつた。いずれにしても、樹木を伐り、熊笹や雑草を刈り集めて焼くまでもつとも労力を要した。新地の畦切りは、比較的条件の良いところでは屈強の者で一日一反歩できたという。この方法は昭和の戦前までつづいた。

内地から渡道、現地にたどりつくまでのことについてはここで触れないが、開墾にさきだつて、住居が必要である。屯田兵や小作人などで家屋が与えられるもの以外の人びとが開拓地で最初におこなう仕事は家屋の建築である。これが着手小屋である。明治三〇年、三一年と農業移民が幌加内町ホロカナイ原野に入地したが、このときの状況はつぎのように述べられている（幌加内村、二八三頁）。

移住者はヨシ葺の拌み小屋を立て、ムシロを張つて雨露を防ぎ、森林を切り開き二反、三反と耕地を広めていった。大樹によじ昇り、枝を落し根廻をして木を枯らし、光線をとり入れ開墾がすすめられたが、大きな丸太を積んで日夜を分たず焼き払った。また小屋には大きなイロリをつくつて、長さ四、五尺くらいの丸太を、丸太を転がすガンタというもので転がして、イ

ロリに入れて火を消さないようにした。

滝上町の張間庄一氏は、一三才で渡道、一五才の明治四二年、滝上三区に入地した。氏の懐古談によれば、一〇月三〇日に建てはじめたが、「釘一本、縄三尺持つて来ていないで、小屋は十一月二日に出来上がった。小屋は拌み小屋でブドール、オヒヨウ（タモの木）の皮をむいて横木をしばり、笹を刈つて屋根をふく暇がないのでとど松の下枝でふき、囲いもとの葉で囲つたが、これでも中は野宿より良かつた。二日の晩十二時頃になるとぼしよぼしよ漏つて来るので見るとみぞれが降っており、夜が明けるまで一尺位雪が降つていた」という（滝上町新、七二―一二頁）。これらの着手小屋は上川町ルベシベでは「合掌小屋」（上川町、一二九五頁）、その他「草小屋」（浦幌町、八二五頁）、笹小屋（音威子府村、四〇頁）などの名がみられる。

また足寄町史にはつぎの記載がある（足寄町、七八―八九頁）。

拌み小屋 開墾生活は、拌み小屋（三角小屋とも、着手小屋ともいう）を建てることから始まつた。

拌み小屋は、二間に三間の四隅から丸太の柱を斜めに立てて結び合せ、カヤかヨシで屋根兼用の壁とし、出入口を開いて延を下げるだけのもの、いわば固定した天幕のような形をしていた。

拌み小屋は、小作人の場合には親方が用意してくれることがあつたが、普通は、地形を選んで自分で建てた。明治三十年代の足寄には、拌み小屋を一棟五十銭で請負う人夫がいた。二人がかりで、その日のうちに建て終わつたという。

通常、開拓者は拝み小屋で秋まで暮らし、そのあいだに家を建てた。家といつても、きわめて粗末なもので、開拓のための小屋であることには変わりがなかった。

少女時代を同町十五戸部落で過ごした蓑島きよ氏の話によれば、屋根はカヤぶき、外がこいもカヤ、壁の内側には木の皮を張り、土間にもカヤを敷いて寝起きをした。父（大谷新左衛門）が木挽きの技術を覚え、床板を張つたのは二年ほどあとのことである（同）。

美深町楠部落の藤本常次氏によれば、着手小屋は「拝み小屋」または「あみがさ小屋」といつて中に柱はなく、笹やキビガラで囲つていた。入口には「むしろ」を吊り、床は「やちだも」や「しころ」^(注二)の割板の上に「むしろ」を敷いていたとのことである（美深町、六三一頁）。

また、遠別町史は開拓時代住居についてつぎのように述べている（遠別町、三七頁）。

入植当時は拝み小屋若しくは堀立小屋、あるいは自然木を、そのままとした笹や草葺の住居に雑居した。家の中央には大きな炉を作つて、大きな木を丸太のまま担ぎ込んで親火とし、昼夜たやさず燃やしつづけていた。夜はこれが灯の代りにもなつたのであり、あんなに大きな炎を上げていく草屋根に火がつかなくつたものだとか古くから後々までよく聞かされた思い出話の一つである。

このように遠別地方では、屋内からの出火はなかつたかもしれないが、燃えやすい構造であることは説明を要しない。遠別町の南に隣接する初山別村では「開墾の始めごろ、父は笹焼きをしていて自

分の居小屋も一緒に焼いてしまった。」というように、自分のつけた火で家屋もろとも農具や家財を焼失した農民もいた（初山別村、三六四―五頁）。

そのような構造の家に失火がみられなかつたのは、やはり幸運といえるのかもしれない。当別町史は、つぎのように述べられている（当別町、一六六頁）。

入地当時の住居は、柱を用いない通称あみがさ小屋またはおがみ小屋であつた。合掌を地面に置いて七つ葉^(注二)（この地に多かつた）やよしで囲い、入口にむしろなどをぶら下げ、内部は土間に枯れ草を積み、その上にむしろを敷いた程度の寝室兼座敷で、居間には大きい長方形のいろりをしきり、土足のままでろぶちに腰をかけてあたり、食事をしたりした。小屋の中は煙で大変だつたらうと思われるが、案外すき間だらけなので、けむたくなかつたと、当時を偲ぶので笑い話である。

またこの構造が火事の原因と結びつき、何戸も丸焼けになつたが、家財も少なかつたので打撃も大したことはなかつたという。

上砂川町では笹小屋に住んでいた。笹は二、三年は腐蝕せず、水ばしりがよくて雨ももらず、すがもりもしなかつた。それでいて煙も自然に外へ出ていった。しかし何といつても狭い小屋の中のことであるので、煙のたえることもなし、暮している人たちの目はしぜんにいためられ、冬の間などは大たい目を悪くするのであつた。ことにタモは煙の中に刺激物をふくんでいるせいか、目を悪くすることが多く、当時の人々は「目くされマキ」と呼んでいた（上砂川町、

五六頁）。

当別町の茂平沢でも災害の項目のなかでつぎのように記されている（茂平沢、一三一頁）。

火災は人災ともいう。が、ときには不可避のそれもある。

開拓当時の家屋は茅ぶきで、壁も茅垣であつた。だから火災ともなれば火移りが早く、数秒のうちに猛火に包まれて焼失したのである。そのため逃げ遅れ、焼死者を出したこともしばしばときく。

大正三年五月、鏑木沢の木村兵吉氏宅は夕食の炊火の始末不備から出火、家族全員が熟睡、家じゅう火の海となつて出火を知り、脱出が精いつばいであつたという。そのために祖母が逃げ遅れて無惨な焼死を遂げた。また、そのころ檉棒金蔵氏宅でも火災にかかり、雇用の子守娘を焼死させている。

明治四四年、大沢付近で開墾ちゆうに失火、おりからの強風にあおられて村有林に延焼し、数百町歩の山火事となつた。そして人家にも飛火して一八戸を焼失したと村史は伝えている。この文章は「火災は人災ともいう。が、ときには不可避のそれもある。」という一節でもつて書き始めている。開拓民にとつて避けようにも避けられない火災の原因が、開拓地には充満していたのである。

さて、開拓民が入地した場所はどのような場所であつたか。もちろん、その状況は一樣ではない。しかし、「昼なお暗い」という言葉をわれわれは常套句として、つい読みすごしているが、それは現実そのままの姿であつたといつてよからう。

置戸町秋田は訓子府川の上流、上クンネツブ原野に明治四四―五

年にわたつて秋田県より平鹿、雄勝の二団体が入地したところである。初年度は、四月一六日に未開のクンネツブ原野に足をふみ入れたという。この状況を置戸町史はつぎのように述べている（置戸町、九七―八頁）。

当時の秋田は数年前に十勝の三島組が砲台用材のクルミ伐採を行なつた時につけた馬道が僅かにあるだけで、未だとけやらぬ残雪に膝を没する悪路をぬけクンネツブ川まで赴りつくや、その先は二か、えもあるタモの大樹林で、先の見通しもきかぬジャングルをわけ、現在奥山英助附近にあつた野付牛役場の建てた四間に一〇間の着手小屋二戸にやつと落着いた。最初の年は木を伐り、これを焼くのが仕事で、火の焚き方がうまければ開墾は成功と思ひ、隣りと火の大きさを競つたものであつた。開墾の困難さから自然、ドブクロを飲み喧嘩などをしてこの年の開墾は一向に進まず、初年度の収獲は一戸平均稻黍七、八升到馬鈴薯五、六俵というみじめなもので、この年の秋に行なわれた境野温根湯道路の土工に出てやつと越年資金を得、既存農家に子供を奉公に出して口数をへらした。中には僅か七才で子守にかされたなど、今日の常識では想像もつかぬ困窮ぶりであつたという。

のちの論考のため、森林の暗さと直接関係のない箇所まで引用したが、森林の暗さを説明する実例は遠別町史にみただけでも、遠別原野明治二九年の状況を「まだ見渡す限りの樹海で、赤だも、やちだも、^{（注四）}どろなどが亭々と天を摩して仰いでも陽をみるこのできないところが多かつた」（遠別町、三四頁）、久光部落については「空も

見えず、太陽の光が射しこむ隙もない茫々と繁る太古の大原始林」(同、七五三頁)、中央部落については「うつ蒼たる密林であつて、直径六尺に余る老大木が散在しており……」(同、七八一頁)などなご枚挙に暇がない。

もちろん、入地した土地の様子は一様ではない。

初期開墾の方法について、穂別町史はニワンや上キナウスのような「いわゆる草原地帯は雪解けをまつて原野に火をかけて焼き払い、はじめからプラオで起こすこともできたが、同じニワンでも杉田農場あたりでは、ナラの木が麻みたいに立ち、ヤチダモその他の原始の巨木が鬱蒼と生い茂つたところでは、これを伐り倒しドッパラに火をつけて燃やした。これが奥地に入るほど樹木が多く、明治四〇年頃までは木材などは売れるものではなく、今日の富内の市街地でさえ亭々たる密林におおわれ、それを伐り倒してさながら台車に積むように木を二本ならべてテコでころがし、枝木を重ねて燃やして耕地をつくつた。長和方面では大木はどうにもならず、枝うちだけして立つたまま腐るまでおいたり、プラオを入れても笹の根がひどいので、夫婦喧嘩をしながら手起こしで伐り拓いた。また安住地区でも密林を手起こしで開拓し、鋤で筋を切つて種子を蒔いた。」と述べている(穂別町、二五九―六〇頁)。

また、岩見沢市志文での熊笹原の開墾についてつぎのように記されている。(若林、一七八頁)

熊笹原の開墾は草原地よりも一層強力な耕馬でプラウの根切車か根切鉋に鋭利堅牢なものを用ふれば草原と同様に鋤起する事が出来る。勿論笹の幹は予め苧り倒して焼くか又は晴天続き

に苧らずの儘で火を付けて焼き払ふ。かうして後に鋤起しハローは草原の場合と同様縦にのみ掛けるのであるが、爪に掛りたる笹の根は草根の如く腐敗せぬものだから悉く積み重ねて焼き棄てるのである。

又馬耕によらず手起こしの場合には、焼き払ひたる笹地を刃先の三角形に尖りて鋭利なる重き唐鋤を以て打ち起し根を振ひ出して焼くのである。笹地の開墾は困難であるが播種後は雑草少く除草には手数を要しない。

このように各地の状況は相違しており、それに応じた開墾がなされるわけである。また、開拓民は、ヤチダモの繁茂している状況を観察して、その土地の肥瘦を占つたりした。(滝上町、一五四頁)

さて、草地、笹原に入植した人びとも火入れをおこなっているようであるが、森林に入地した人びとは火入れ前に伐木をおこない、これを積んで火をつけるのである。しかし、木こり技法を知らない者にとつて、大木の伐採は大変なことであつた。^(注五)

明治三〇年、最初の移住団体として遠別町に入地した愛知団体の開墾の苦心について、「こうした密林の開墾は容易でなく、大きなまきかりで傷をつけて枯らしたり、鋸の目が思うようにたてられないので、大木の根本に木を寄せかけて火の力で燃え切らせて倒したりした。それでも倒れぬときは燃え口に挺を入れてむりに倒した。」といわれている(遠別町、三四―三五頁)。

着手小屋を探すのに苦勞するような密林の開墾の最初の作業は立木の処理である。これを上砂川町史をもとにして、伐木、皮はぎ、枝おろしについて述べてみよう(上砂川町、四八―五〇頁)。

伐木（直径一―二尺の木の始末）のこぎりで横に切り目をいれ、つぎに反対側から前の切り目よりやや下に「ウケ」を切り込む、さきの切り目に「ヤ」を入れてうち込むと木は「ウケ」の方向に倒れる。一反歩に三〇本から四〇本ぐらいの木があり、一日で伐木できたという。蘭越町では川縁の木は川へ倒して流したという（蘭越町、七八頁）。

皮はぎ 直径三尺以上の大木は、伐り倒すのに時間がかかり、倒れると、立つていたときよりも広い地面をとり耕地が減少する。そのため幅一尺ぐらいの輪状に皮をはぎとり、樹液が上昇するのを防止、枯れるようにした。三月頃は樹皮に液体が多く、剥がしやすく、タモ、ヤチダモなどは一年で枯れた。シラカバはすつかり剥いても四・五年はかれないといわれる。美深町辺溪ではこれを「根まわし」と呼び、斧で根囲いの樹皮を甘はだまで削り、枯らしてから切り倒したと菊地専太郎氏は語っておられる（美深町、六二九頁）。枝おろし 大木の幹はそのままにしておいて、枝だけをきり払うことである。これは技術と習熟とを必要としたので人に依頼するものが多かった。普通の日雇賃金が二〇銭か二五銭のころ、「枝おろし」は大木一本を五〇銭ぐらいでひきうけ、鋸と鉋で、およそ二〇メートルもある大木を五・六本ぐらい処理し、いい仕事であったという。この上砂川町鶉に入地した人びとは、福井・石川両県の白山山麓地帯出身で山仕事にはなれていたが（上砂川町、五五頁）、内地で柴木か薪の伐採の経験がなく、鋸の目立ても知らず、土佐鋸か会津鋸に鉋一挺で、三尺より四尺もある大木を人力だけで伐り倒さねばならなかった。しかし、このような木を倒すことにより一反四方が

明るくなるといわれたが、この倒木を片付けるのに枝を払い、幹を伐つて手や挺でころがして運び、焼くのに五〇日も要したことを述べている（滝上町、一五五頁、同新、二九一頁）。

さて、このようにして、陽地性の穀物などを栽培するために、日の当る場所をつくり出すわけであるが、そのつぎの過程を上砂川町史はつぎのようにのべている（上砂川町、五〇頁）。

だいたい伐木作業が終わると、その跡に生まれた一、二段歩の明るい土地に、とりあえずまきつけをしておいて、また次の伐木にうつるのだが、しかし、そのまきつけをする前にササの始末をしなければならない。ササはからずにそのまま焼きはらった。

ササを刈らずに焼き払うことは、費用や時間や手間を省くやむを得ない方法として黙認されていたようであり、「火耕法」と名づけられている。五月から七月いっぱいにかけて、六尺から九尺の火防線をつくり、高さ五尺もある密集した笹原に火をつけたという。これはきわめて危険であるため、天候や風位を見定め仲間の応援のもと慎重におこなわれた（上砂川町、五〇―一頁）。一方、美深町、敷島部落の藤原重平氏は「笹刈りを七反くらいして、あとは焼払い」と語られ、同町辺溪部落の菊地恵太郎氏は「笹を刈った開墾地はわらじで歩くと危険なので、木を削った大きな下駄を履いて作業した。」と語られ（美深町、六二九頁）、同地方では笹刈りがおこなわれていたことがわかる。

さて、これまでの記述の総括という意味でもないが、遠別町、遠別原野に明治三〇年入地した越前団体の生活を見ることにしよう

(遠別町、四五頁)。

雪融けを待つて伐木開墾に着手した。見渡せば熊笹が身の丈を越すほどであり、赤だも、やちだも等の大木が生い繁つており、このようなところに楽天地が築けるかとしばしあ然としたほどであつた。しかしながら燃えるような開拓心で、貧弱な道具と未熟な技術をもつて大密林に勇敢に立ち向つたのである。

一本の大木を倒すのに二日も三日もかかつたこともしばしばであつたという。夫は大木を妻は小木を伐り、倒した木を一カ所に積上げ夜を日について燃やした。こうして切り開いた猫の額大の地に木の株と株の間を、耕すというよりも、むしろほじつて粟、ひえ、そば等を蒔いた。

最初の蒔き付けは、文字どおり耨耕そのものを想像させる表現である。

穂別町史は初期開墾について、前述のように、草原地帯といわれたところでは、雪解けをまつて原野に火をかけて焼き払い、はじめからブラオで起こすことができたというが(穂別町、一五九頁)、その下流の鶴川町では、直径二、三尺以上の巨木は、立木のまま鉦や鋸で枝を切り払つて日光の透過を良くする一方、立木の根元を帯状に皮をはいで自然に枯れるのを待ち、切り払つた枝は焼いて、その灰を肥料とした。そこは、立木があつても根の際から深く耕すことができたので、拔根作業はあまりしなかつたといわれている(鶴川町、四三八頁)。

この記述では、どのような耕法が用いられたのか不明であるが、初山別村史は、おもに唐鋤、平鋤を使用する方法について、「開墾生

活の自給のためまず雑穀類が作付され、蒔付方法も、一面の土地を掘返し整地して蒔付けする普通蒔付けや、蒔付けを急ぐために一面に掘らずに掘つていない処へ畦を切つて直ぐに蒔付けする切蒔付け、あるいは畦になる処だけ掘つておいてそこへ畦を切り蒔付する間掘蒔、または処々に穴を掘つて蒔付けする穴掘蒔などが用いられた。」(初山別村、三六四頁)と述べている。しかし足寄町史に、「さぐり蒔き」「畝蒔き」「筋蒔き」などともいい、土地の表面を反転させては種子を蒔く、きわめて能率的な「削り蒔き」をした人が多いと記されている(足寄町、七九〇頁)ように、耨耕はともかく、きわめて簡便な蒔き付けが多く、通常の蒔き付けがおこなわれるようになるには、数年を要したと思われる。

愛別村の最古の文書であるといわれる「明治三十七年及び三十八年越路耕地状況」は、土地所有権者の反別を、成墾地・サクリ蒔・水田地・宅地の四項目に分類している。この越路地区は明治二〇年代末期から三〇年代にかけて入地者のあつた地区であり、明治三十七年分をみると、いうまでもなく水田地はなく、総反別八八四・二一反中成墾地 二三九・三〇〇反、サクリ蒔 四一・〇〇〇反、宅地 二八三・八〇〇反となつている。これは上川町史よりの引用であるが、同町史はこの「サクリ蒔」を「新墾地独得の播種方法でまだ畝作りの出来ないそこをさぐり求めるようにして広くて六畳間ぐらいの地にけずり蒔をしたものをいう。」と定義づけ、「越路地区だけでなく各地に見られたいかにも北海道色のある開拓状況である。」と説明している(上川町、二四七―八頁)。

また上砂川町鶉の状況にもどるが、ここでは、春になり入地した

ものは伐木と笹焼と蒔き付けとを併行しておこなつたとされ、蒔き付けの方法として「ばら蒔き」と「削りおこし」の二方法があげられている。「ばら蒔き」はヒエ・アワのような小粒の種子の場合に使われ、灰の上にばらまきにして、こまざらいなどで表面を簡単に掻きまわしておくだけのものであり、「削りおこし」は、イナキビ・トウキビ・カボチャなどのやや大粒の種子をまくときの方法で、ちよいちよいと土に穴をあけてまいてゆく方法である。労働力のある家では焼けた笹の根をたたいて歩いて平らにして、あらためて蒔き付けをおこなつたという。二年目には、前年の笹焼きをした畑に、生き残つたササの根があるので、その芽を鋤先でかきとつたり、おしつぶしておく。三年目には、ササも生活力を減じているが、やはりつぶしておく。四年目にはササの鬚根はほとんど腐り、引き起こすと、造作なく切れて土からはがれ、木の根も腐つて容易に掘り取ることができ、このようなものを一度雨にあてて、土などを洗い落して、畑の一方に積んで焼く。このようにして、四年目の春にはじめて畝をつくり、この畑を「新墾」と呼んだ（上砂川町、五一―二頁）といわれ、また美幌町でも、明治四一年都橋に入地した大橋秋治氏は「開墾はまず木を倒して小枝を払う程度で、木と木の間を三〇五坪の空地に鋤で筋にけずり、そこに麦、そば、薯等を蒔付けした。明治時代は部分的に開けたのみ、大正になつて漸く畑らしくなつたが、大木の根がなくなつたのは昭和のはじめである。」と述べられている（美幌町、六二―四頁）。一般に、このように何年かの努力の結果、開拓地は農地に、開拓民は農民になり、住宅、農具なども充実し、生活も安定するのである。

注

- 一 キハダ *Phellodendron amurense* (シラカバ)。
- 二 ハンゴンソウ *Senecio cannabifolius* (シラカバ)。
- 三 足寄町史にはつぎの記載がある（足寄町、八〇―八九頁）。
中央部の囲炉裡にはヤダモ・アカダモなどの丸太を焚き込み、目を赤くして暖をとつた。冬は「すがもり」が凍りつき、団子のような氷塊がぶらさがり、火を焚くとそれが溶けて雫が落ちた。
ろくな煙出しの設備もなしに囲炉裡で生木をいぶすのは、いかにも非衛生のようであるが、近藤悦朗によれば計算ずくでやつていたのだという。三年ほどいぶして草屋根の中の虫を殺すか追い立てるかして、漆をかけたように固めてしまわないと、虫に木質部を食われて家がもたないからだという。
- 四 ドロヤナギ *Populus maximowiczii*、ドロノキ、白楊樹などといわれる。これは初期の工業であつたマッチ軸木製造に利用された（大樹町、二〇頁）。そのため、つぎのような事情が斜里町川上などでみられた（斜里町、三四―四五頁）。
まず入植地は木を切り倒し笹を刈り、それから手起こしするのであつたが、直径四―五尺以上の大木があり、葉が茂ると空が見えなくなるくらいであつた。当時はドロの木以外、まだ木の買い手のない時代であつたから、切り倒した木は何カ所にも集め、何日もかかつて焼き払つたという。伐木の跡には根株が残り、馬耕はできず、すべてが人力による手起こしであつた。
- 五 美深町報徳部落の佐久間亀太郎氏は「土地は草地であつたので拓きやすかつた。」と述べられている（美深町、六三―〇頁）。それだけ森林の開墾が大変であつたことを意味するわけであらうが、殖民地における森林と草地の割合とか、開拓の難易さ以外に、農地としてのどのような要素が考慮されたかというようなことなどについては、今後の調査にまかしたい。

六

天候の予測を誤ったというのか、予測がおよばなかつた天候の急変によるというのか、白滝町の大火についてつぎのように述べられている。「大正六年五月二十三日の朝は無気味なほど真つ赤な朝焼けからはじまつた。連日の好天続きで開拓者たちは新たに火入れを行なうものの、昨日行なつた火入れのつづきを行なうもの、火入れ跡地にさつそく鍬を入れるもの等それぞれに仕事のはじまつたが、午前八時ごろになつて東の空が曇りはじめ、火入れ中の開拓者は過去の経験から風来るを察知し急ぎ消火にかかつた。まもなく西北の強い風が吹きはじめ、時をまたず風速三五、六メートルもあろうかと思われる烈風となつてしまつた。山々はうなりを發し、畑の土を空に巻き上げ畑石を吹き飛ばし、外にいても家にいてもまことに危険きわまりない状態で、人々はただ家の中にあつて恐れおののくばかりであつた。異常乾燥のなか、こうした風によつて不完全消火の残り火が「ふいご」にかけられたごとく再燃しはじめ、上支湧別および奥白滝方面より火の手があがり、各所の残り火と合し西北の猛風にのつてたちまちにして上支湧別、および奥白滝は火の海と化し、瞬時にして支湧別、上白滝、そして白滝市街をも嘗め尽し、さらに火は旧白滝山間部に入り南丸瀬布にて下火となつた（白滝町、三四一頁）。

この大火に遭難した人びとの描写は再録するにしのびないほどの悲惨さである。その被害状況について、「こうして地獄絵さながらの様相を呈した大山大火によつて旧白滝方面を除く白滝全域総戸数の八割強にも及ぶ二百五十余戸を烏有に帰し、焼死者三、重軽傷者二十五名余を含め、一千百余名の罹災者を出し、播種せし耕地は上土三センチ余を吹き飛ばし、かつ土をも焼いたため種子ごとく全滅、被害面積三百四十五町歩に及んだ。また多少の余裕あつて衣類米麦その他を土中に埋めたものはほとんど蒸し焼きとなり、全村全滅に等しい名状すべからざる惨状であつた。」という（同、三四三頁）。奥白滝に入植していた大庭千代吉氏は当時の模様を「五月二十三日朝九時ごろ突然突風

のような強い風が出てきたため火入れ中の消火作業も間に合わず、方々で火が舞い上つた。風は言語に絶するほど物凄く、小石が飛び、手に砂を握つて顔をめがけて、いきなり投げつけられる時のような物凄さであつた。あつというまに火は家屋、原野、山林をなめつくし、午後二時ごろには何事もなかつたように風は静まつた。家屋などの焼け跡は強風のためホウキできれいに掃かれたごとくになつていた。私の家ではストーブで鍋にてごはんを焚いていた時、延焼のため家が焼け、風のため屋根は火の玉となつて飛び散り、ストーブの上のごはん鍋までも吹き飛ばされて遙か遠くころがつていた。全く生きた心地はしませんでした。」と述懐されている（同、三四四頁）。また、皮肉なことに天をも焦がす大火によつて未開の原野がそして山林が焼き尽され、見渡す限りの焼け野原となつたがために白滝の開拓が意外に早く進捗したといえよう。」とされている（同、三四五頁）が、この現象は普遍的にみられたことで、火が意識的につかわれたかどうかの問題であり、火の作用した場所は、そのまま畑になりえたということは後述する。

七

同町報徳部落の山北誓一氏も「開墾地は笹の切根があるため木を削つた下駄を履いて歩いた。」と述べられている（美深町、六三〇頁）。

第三章 人類と火

開拓で苦心したのは伐木で、夜を日についで燃やしたが、大木は遠別川にどんどん流してしまつた。熊が出るため焚火は消したことがなく燃やし続けたもので、小屋掛けをしている附近までこの原始林の猛獣が姿を現わしたのである。

一抱え以上もある大木が、昼なお暗く繁つていて三間先もみるこ
とができなかつた明治三〇年頃の遠別町東野の樹海のなかに入地し
た人びとの生活である（遠別町、八〇〇—一頁）。明治四三年入地し
た美深町報徳部落の奥山吉太郎氏も「夜は熊よけのため木を積んで
夜通し燃やした。」と語られている（美深町、六三〇頁）ように、開
拓当初の人びとは、豊富な材木をおしげもなく焼いて、暖をとり、
熊害を防いだ。

ほとんどの獣類が火を恐れるのに、人類はそれを利用している。
人類は発火法を発明する何十万年も昔から、火を手なずけて利用し
てきた。リントンによるまでもなく、原始民族では火の保存に留意
し、漂移生活において、移動にさいしては火を運搬し、屋内では炉
に火種をたやさなかつた。人間にとつて、人の使用する火は人類の
最良の従僕であり、有力な協力者であつた。猛獣よりの保護のほか、
棒の先を焼いてかたくするとか、幹を焼いてくりぬき丸木舟をつく
るなど、技術方面でも利用され、やがて土器の製作や冶金にも利用
されるようになった。また火は食物の調理に利用されるようになり、
それまで生では食べられなかつたタロ芋やマンジョーカ^{（注一）}などが食物
とされるようになった。穀類や豆類もほとんどのものは調理しなけ
ればたべられないとゆう。さらに火の使用により、食品の長期保存
が可能になつた。果食の類人猿に比して、われわれ人類は、穀類等
を食べることにより、はるか寒帯にまで、その居住圏をひろめるこ
とができるようになった。ゆうまでもなく、森林を火によつて耕地
にかえることも、火の大きな働きの一つである（Linton, pp.
17—19）。

さて、採拾収集生活しかおこなわれていなかった場所に、農耕が
おこなわれるようになると、どのような現象がみられるであろうか。
アンダーソンは興味ある証拠を紹介している。

ヘラオオバコ^{（注二）}は田園地帯にありふれて見られる雑草で、きわめて
明確に識別できる花粉をもっている。Iversonはデンマークの泥炭
地でつぎの知見を得ている。つまり、そこでは蕁などの花粉を含ん
だ層の上に炭化物を含んだ層があり、それをヘラオオバコの花粉を
含む層が覆っている。これはかつての森林地帯が焼き払われて、開
けた耕地になつたことを示し、青銅器時代の農民の到来という文化
変遷とも一致している（Anderson, pp. 3—5）。

このことは、さきに述べたように、北海道において開拓民が千古
斧鉞を知らぬ原始林を焼き払つて開墾し、農地化してゆく過程と平
行関係にあるように思われるが、はたして、人類と火と^{（注三）}植生との関
係は、つねにこのように単純なものであろうか。

人類が農耕を始めたことは、牧畜の開始とともに、食料生産の段
階にはいることで、きわめて重大な意義のあることは論をまたない
が、生態学的にみれば、栽培ということは、人類と植物との間の相
互関係の変革を意味する。農耕以前の関係は、人類が絶対的に、植
物は任意的にという不可逆的であつた共生関係を、ともに絶対的な
関係にすることになる。つまり、人間が植物の生存にそして、人間
の要求する特性をつくり出すのに必要な環境をつくり、その生活史
の全期間にわたつて関与することを意味する。つまり人間が植物に
特定の微気候を提供することでもある（Wagner, pp. 174—175）。農
民は陰地植物である蔦を必要とするのではなく、陽地植物である穀

類などを求めたのである。そのために農民は森林を焼き払ったのである。

しかし、人類の火による環境への介入は、この時点ではじまつたのではない。人類が火を使用しはじめてから、枯木や漂木のみならず意識的に枯らせた木材を燃料に使用したことが推測されている。そして泊地周辺では、もれ火などによる野火が生じ、一年生植物の生成を促し、採集の能率が向上がみられ、やがて放火による火ぜめ狩猟法を完成させる。この火ぜめは後期洪積世の大狩猟 (*grande chasse*) でもある。火入れのおこなわれた場所は、巨木の繁茂している場所に比して、蛋白質に富んだ若い部分や種子などが人や動物の手にはいりやすい地表に近い高さにできやすくなり、その後、かなり意識的・無意識的な人類の火による植生への介入はおこなわれたとみることができよう。このようなことは、落雷などによる野火の結果を観察して得られた知識によるのかもしれないといわれている (Sauer, p. 54)。

注

一 キヤッサバ *Manihot esculenta*、ユカとかタピオカなどとしても知られている。有毒の苦味種と甘味種があり、前者は外皮部に多量の青酸を含有している。しかし、水洗その他の処理によつて、両種とも食用に供されている。

二 *Plantago lanceolata* 日本にも、江戸期末に渡来したといわれ、全国に広布、とくに北海道に多い。(長田、五四頁)(図五)

三 チャードによれば、南フランスのエスカル洞穴の生活面に、文化遺物はほとんどみられないが炉址があり、これが、現在知られている



図5 へらわおほミ *Plantago lanceolata* L.

火の使用をしめす最古の証拠とおもわれている。これは、それまで考えられていた時代より、かなり潮るもので、少くともミンデル氷期の開始期(七五万年前)よりも古いものと年代設定がなされている。

(Chard, p. 100) また、中部洪積世までは、人類の生活圏はその自然生息地である熱帯地方に局限されていたが、この時期になると、一部の原人 *Homo erectus* は寒帯に進出した。これも火を利用した結果によるものと考えられている。それは、火の常用——人がはじめて自然力を制御した——により、生理的適応の限界を越える能力を獲たことを示しているといえる。(Chard, pp. 103, 109)

またチャードは、保温のためには、衣服より早くから火を使用したと推測している。そして、熱は火のはたす役割りの一つにすぎず、火に獣類が近づかないことも、人類が火を手なずける重要な契機になったものと推定している。また、照明はもちろん、前述のように木の先

を焼いて堅くして堀り棒をつくつたり、丸木舟をつくるのに木材を焼いてこがしたところを原始的な工具で刳つたり、勢子のように鳥獸を追いつすのに使つたりした。調理にも使用されたが、これはのちのことと思われている。（Chard, p. 115）

また、類ネアンデルタール人の住居址に、通常炉址がみられるが、これは火が一般に使われるようになったことと解されている。このことはまだ当時の発火具こそ発見されてはいないが、発火法は発明されていたことを意味するものであろう。人為的な発火法は道具を製作したり使用したりしているうちに偶発的に発見されたものであろう。

主要な発火法は、燧石のような石英質の石と硫黄質の石（あるいは鋼と石）との衝撃によるものか、あるいは木片を辛抱強く摩擦することによるものである。（Chard, p. 140）

また、バウイは火を使用することの社会的影響について考察を加えている。妊娠や育児によつて行動を束縛されない男子は、狩猟や飼あさりなどの遠征をおこなつていたのにたいして、女子は植物採集や獣骨を刳つて髓をとり出したりする時間を要する労働や幼児や子供の世話をしていたが、人類が恒久的なものではなくても泊営所を設営するようになると、女子はいよいよ狩猟遠征には参加せず泊営地の近くに拘束されるようになった。そして、火が泊営地に導入されるや、さらに火の番と食物の調理という仕事がつけ加えられた。バウイはこのような分業が、原人の言語、思考力、性情等にそれぞれ別個の淘汰の要因が働くようになったことを推測している。

アフリカにおいては、火が使われたことを示す明確な証拠は五万年より遡ることはできない。一方、北京原人の場合、竜骨洞の中の木炭や焼けた骨から、人類と火の結びつきが四〇万年前に存在したことが知られている。これは、落雷、火山などによる自然火より採火したということ以上のものを意味するのではなく、発火法の発明は、きわめて後のことであり、火を保存することの重要性がうかがえる。ロー

マのベスタの神にたいして、火を絶やさずしておくことなど、多くの宗教において永遠の焰が重要な象徴となつてゐる。現在でも女性松明で火を運ぶ習慣があり、かつては、日中の旅行にさいして、火は湿つた粘土塊のなかに燃えている燠を入れることによつて運ばれたことを想起させる。

また火の使用により、肉は幼児や老人にも食べやすくなり、食事に要する時間を短縮させた。ヨーロッパにおいても、三〇万年前に肉の調理に火を使用した状況証拠がある。これはスペインのフアルバ遺跡である。ここでは人骨はみられないが、鹿、馬、オーロックス、象などの巨大動物相の割られた骨が木炭とともに発見されている（Bouhey, pp. 108—112）。

第四章 火 災

まだ子供の時分でしたが、はじめ太陽が真赤に見えていたことを覚えています。黒い煙が遠くに見えてきたとき、はじめて山火事であることに気づいた。その煙が原子爆弾の破裂したような恰好に見えるまで一週間ぐらいかかったが、そうすると煙は部落一帯に立ちこめて立つておれないくらいでした。畑の中に穴を掘りそれに食糧や衣類を入れて土をかけ、子供らは防空壕のようなもののなかに入れられた。いよいよ中雄武から一里ぐらい

の距離まで来ると、バリバリというものすごい音響をたてはじめる。それに木が密生しているので、梢の葉から葉を伝つて燃え拡がり、ときどき風にあおられると物凄い煙になつて空にのぼつていく。

だから太陽なんか全然見えない。中雄武の山火事はあれがはじめてです。

金村喜一氏

これは雄武町内で、谷間に細長くひらけた中雄武における、明治四四年の大火の体験談である。(雄武町、七八九—九〇頁) いうまでもなく、火災は恐ろしく、またその結末は悲惨である。たとえば、斜里町朱田東ではつぎのような状況であつた(斜里町一〇九頁)。

開墾に火はつきもので、火漏れによる被害は農場など、大地積におりおり惹起したが、ここではつぎのようなちよつとした不注意によるものが多かった。大正十二年五月、東八線九号南部団体、小野寺茂三郎宅の炭がまから出火、乾燥時の出し風に乘つてみるみるうちに延焼飛火を重ねて、六十五日間も燃え続け日の出神社前までやつと訪れた雨に終息した。火防のため部落全員が炊き出しで出勤、長い期間だつたので農作業に多大な影響を与えた。なにぶんにも広い地域におよんだが幸いにも、防火の功が奏して人畜には被害はなかつた。なかには飛火を避けるため井戸に家財道具を入れて難をのがれる始末だつた。つまり、開拓地は火災のおこりやすい状況にあるうえ、一度火災

がおこつた場合の状況が、既存の地域と異なつて注目に値したい。われわれは火災を一瞬の悪夢のように想像しがちであり、事実、数時間で、大火と呼ばれるものでも、数十時間で鎮火するのはなかろうか。具体的なことはわからないが、振袖火事は明暦三年一月一八・一九両日にわたるものであり、(衣笠1、四一四頁)、天明大火は同八年正月晦日の出火で、二月二日の三日目には鎮火している(衣笠2、一二八頁)。開拓期のものと、江戸、京都の火災とを、その被害額や社会的影響を同列に比較することはあまり意味がないように思われるが、二ヶ月にもわたり、生活の本拠をおびやかす火と直面した開拓者の心身にわたる労苦はおよそ想像を絶するものであろう。

とくにこの章のはじめにもかかげた明治四四年五月の山火は、その最大のものといわれている。(注四) 五月九日から二一日の降雨のあるまで、「南は渡島の関門より北は十勝北見に至るまで、今や山火到る処に猛烈を極め、将に十一州の山野を焼払はんずる勢ひ」であり、「一端消し止めたりと信ずるや、一回風力を増せば再び地下より燃上るを以て、到底人力にて防禦し能はざる個所多し…降雨を俟つの一策あるのみ。」といわれその被害は惨たんたるものであつた(雄武町、七八七—八頁)。

このようななかで人びとはどのように火と対面したのであろうか。同町の高台にあつた田口源太郎氏宅の状況が、田口淳二郎氏により伝えられている(同、七九〇頁)。

尋常五年生だつたでしょうか、二週間ぐらい濠生活を続けたものでした。父は札幌に出て政治運動に奔走していたので、母

の指揮にしました。母が「来たぞウ」と声をかけると、濠の縁に立てかけてある畳で蓋をして息を詰めて隠れ「もういいぞウ」の声がかかると思はねのけ、うまい空気を腹いっぱい吸った。火は熊笹の根をくぐって十町もさきで火の手をあげるものだ。竜吐水があつたが、幼稚な竜吐水ひとつではどうもなりません。

太陽は赤黒く濁つてただ円いだけで、火の走る音はゴウゴウという物凄いものでした。夜になると火柱が何千と立ちならび、それが倒れる度に火の粉がぱーつと空いちめんに散つて、凄惨というのかきれいだとか……。母の弟は日露戦争の二〇三高地で廃疾になつたが、母はそれを思つてか、「ロシア軍の攻撃もこんなだつたらう。」といつていました。

定期便の大隈丸と高松丸も通つたが、近寄れるものではなく、ただ沖でボーボーと汽笛を鳴らすだけで行つてしまつた。通信が途絶しているのでこの有様を伝えることも出来ず、また通じて見たところはどうなるものでもない。火は濠の十町さきまで来たが、雨が降つて消えたのでさいわい延焼を免れました。これだけの大火で人死にのなかつたのもさいわいでしたが、恐怖のための流産騒ぎがあつたのです。

もちろん、人命にかかわる火災があつたことはいふまでもない。大正三年五月、無心したワラジ銭を断わられた男が、立腹して付近の草原に放火したのが原因の山火事で、開拓途上にある留辺蘂町大和地区では六戸全焼のほか、大和四区の入植者の半家が家をうしない、天内家では、カンさんほか五名の焼死者を出した。そのうち

天内夫人は子供を抱いて焼死していたましい姿は、見るものの胸を強くうたずにはおかなかつたという。この開拓殉難の人たちは付近にねんごろに葬られたが、その後共同墓地に移され、同区部落民が毎年忌日に追悼法要をいとなんでいるという（留辺蘂町、六七七―七八頁）。

さて、右の場合は放火によるものであるが、火災には放火、もれ火以外に種々雑多な原因があろう。大正一四年頃、機関車の飛火によつて浦幌町上厚内トンネルの上から燃えだした（浦幌町、六二頁）り、音威子府村、音威子府小学校は落雷によつて全焼している（音威子府村、四一五頁）。その他、魚釣りにはいつた人の不注意（斜里町、一〇九頁）や、雨乞いの火などはとくに開拓と直接関係するものとはいえないであろう。明治四三年五月中川町歌内に生じた火災（中川町、六六七頁）についてつぎのような記述もある（同、八二三頁）。

一週間ほど焼え続けたこの山火事の原因は、野火となつていますが、当時、まだ定められた墓地も火葬場もなく、死人がでると自分の畑の角か近くの沢に入つて野外で焼いたもので、このとき飛び火したのだといわれています。このころは、まだ消防体制もできておらず、部落民総出で笹を刈り、防火線をつくつて、延焼を防ぐのが精いっぱいであつたのです。

この火葬による山火など、既存の整備された地域ではきわめて稀なことかも知れない。開墾地では森林に火が逃げるだけでなく、畠も焼けるという特殊性もあつた。占冠村双朱別の長老山崎力太翁の談話は興味があり、意味深い（占冠村、七〇九頁）。

…「ケズリマキ」で「イナキビ」を作付したところ、夏になつて畑が乾燥した。畑といつても笹の根やゴミがある。ところがこれに他の畑の開墾の火がついて畑の土が次々と燃え、遂に全部焼けてしまった。山火事でなくて畑火事である。…

この畑火事で作小屋が二つも焼けたが、部落に結婚式のあつた夜なので、その帰り道で発見したが、木も草も余る位ある時代なので二日の手間が燃えると思えばよいから消しにも行かなかつた。

この後半の部分については、後章で触れることとするが、開拓地は「火入れ」という開拓法だけでなく、周囲の森林、畑、家屋の構造など、どの要素をとつても、火災と結びつかないものはなかつた。上砂川市井史は火事の項をつぎのように締めくくつてゐる（木村、一五一頁）。

成墾後まだ間もない新墾時代の火事の特徴として、山が焼けるばかりではなく、畑もまた焼けるのである。畑には、一反あたり五六株ずつの、大樹の切株が残つてゐる。これらの切株はいずれも地表三四尺のところまで切られてゐるし、すでに枯れきつてゐるから火を呼びやすい。

また、手のまわらない家では、まだ畑の中にササの根などを積んである。

火は、これらの可燃物を選んで、飛び火しやすく、四方八方に燃え広がるから、当時の山火事は危険でもあり、凄惨でさえあつた。

屯田兵の開拓地である篠路兵村も野火に襲われている。その状況

はつぎのように記されている（篠路、二七頁）。

明治二十五年五月五日！開祖達が移住して四ケ年目、何処からか燃え怒つた野火は、風向乱れたる烈風に煽られて、全部落を包んでしまつた、森は燃える、草原は焰となつて燃え狂ふ。

枯葉や落葉の堆積層であつた部落の耕地は一面に燃え広がつた。部落の全面は焰と煙りの塊りとなつた。必死の消火も空しく、兵屋十数戸を全焼し、其他家具類等を焼失したもの多く、その被害は惨憺たるものであつた。

多数の訓練された壮丁のいる兵村でさえこのような状況である。他の部落など、多くの場合手のほどこしうがなかつたのが実情であつたと考えられる。

このような状況も開拓が進むにつれて次第に変化するのとは当然である。岩見沢市志文の辻村直四郎氏は「明治二十八年の冬から住宅の新築を思ひ立つた。未開地では樹木の始末に困つて焚き続けてゐるから粗末な草小屋でも寒中も凌げるのだが、追々開けて林木も少なくなると薪も節約しなければならず随つて住宅も角柱で天井を張り、戸障子を嵌めた火の気のこもる家が必要でもあり、又開けて来ると人もさうした家に住みたくなる。」と語られてゐる（若林、一八二頁）。現在、札幌市になつてゐる札幌郡白石村には「開村当初は野火頻にたりしも、村内林木の伐採さるるに従ひ漸次其憂ひ少なく、…」との記録が残されてゐる（白石村、一六九頁）。いうまでもなく、森林の減少以外に多くの要因があつた。たとえば明治二十一年に公布された「山野火入取締規則」は同四四年に従前の「届出主義」を「許可制」に改められるなど大改正され、さらに、大正二十二年には「山

野火気取締規則」が制定され、ますます取締りは嚴重になつた（北海道、一一〇頁）。防火体制^{（注一〇）}についても同様のことがいえよう。ここに江別市美原の歴史をふりかえつて本章の結びとしよう（美原、一三六―一七頁）。

開墾をするのに笹やよしを刈倒して焼いたのでその飛火でよく野火があつた。明治三十七年に簡易教育所が野火のため焼失し、昭和五年には第四部落に野火による大火があつた。その外、毎年のように野火は続いた。泥炭地であるためこれに燃え移ると容易に消えなかつた。住宅の火事も毎年のように続いた。

草ぶきの家であつたり、泥炭を燃料としていたことからいろいろの飛火や子供の火あそびなどが原因であつた。

ストーブがついてからも円筒の飛火やストーブの過熱などで火災を起した家も多かつた。

このように火事が多かつたので古峯原明神を美原神社に合祀した。^{（注一一）}

火事の知らせには、昔は板木を辻々につるしてこれをたたいた。半鐘が設けられたのは昭和の初め頃で三二線の一〇号に建てられた。昭和一〇年頃に三五線の一〇号にも建てられた。三二線一〇号の火の見やぐらは老朽したため昭和三五年に鉄柱で建替えた。昭和三八年に三五線一〇号の火の見やぐらも建替えた。

注

一 朱内東には、大正七年以来秋葉神社があつたが、昭和三十三年赤上

神社に合祀された（斜里町、一一〇頁）。このことについて同町に照会したところ、同町史の編纂にあたられた金 喜多一氏より、「部落民が秋葉神社を建立し、火の神・日の神である津速産霊命・火産霊神を祀り、部落開拓の神として崇敬されていた。」との回答が寄せられた。

二 同斜里町以久科北では、昭和二年五月、排水溝に捨てた通行人の煙草の吸い殻の不始末で泥炭が燃えだし、一年間にわたり一〇〇ヘクタールが焼失し、大雨により自然鎮火したことが記されている。また鎮火したあと、道路ふちに馬が上ると一メートルくらいも泥炭灰の中に落ち込んで火傷をし引き上げるのが大変であつたという。ちなみにこの焼けた木橋は架け替えをされたのちも、長く「焼け橋」と呼ばれたとのことである（斜里町二、二二八―二九頁）。

三 北海道の山火事の代表として、明治四四年の全道的な大山火をあげる事ができる。このときは火災数五二三件、焼失面積二八・七余万町歩、損失一一六・八万余円と記録されている（北海道庁一、六二八頁）。

四 明治四四年の大火は、赤平市では、五月十七日幾春別方面から歌志内にはいり、さらに山を越えて空知川沿岸に進入、下平岸の農家二二戸を焼き、ペンケ沢でようやく鎮火したという。約一か月間は煙のために太陽も見えず、降雨がないため八月ごろまで燻つており、百戸部落の北側の山は、八・九月ごろまで燃えていたという。そして北海道庁勤務の三国重四郎氏のつぎの視察談を引用している（赤平市、一五八頁）。「五月の中頃のこと、お天気つづきのため極度に乾燥しているのかかわらず、火入れをしたものだから、いたるところに山火事を起こした。野火は一瞬の間に半みちぐらい飛んで行くという具合で、歌志内に起つた山火事で家屋數十戸を焼き、人もだいたい死んだ。炭鉈にも燃えうつて堅坑に火が入り、三年も消えなかつたというくらいである。実にその惨害はいつくせないほどである。そのとき私は赤平の方から空知川の沿岸をしらべ歩いたが、焼跡から屍臭がする

ので探してみると、大きな熊が焼け死んでいる。それも一頭ならず二頭までも少し離れて倒れている。中の山では、逃げ足の得意な熊でさえ、にげおうせないでやられるほど火勢が猛烈であつた。赤ん坊を土の中に埋めて逃げたが、あとで堀り出して見たら助かっているという話もあつた。」

五 放火にしろ、失火にしろ、自然発火による火災にしろ、本来燃焼さるべきではないものが燃焼することが火災と呼ばれるものであろう。元来、火の使用とは、燃えるべきではない可燃物と隔離された可燃物（燃料）を、その勢力を調整しながら希望する時間存続させるべく管理することといえよう。「もれ火」「飛び火」などという言葉が使われているが、まさに隔離されていた火が人間の管理下より逸出する状況を適確に表現したものといえよう。

六 南富良野村史にはつぎの記載がある（南富良野村、七二―頁）。森林地帯なので山火事には充分注意していたが、大正十年狩振岳頂上の三角点に落雷があつて二日間燃えつづけたが、この自然のいたずらはまた自然が解決してくれた、折からの雨で燃えしずまつたのである。

七 明治四一年七月八日、羊蹄山頂でも出火、全山火の海となつたが、十二日より降りつづいた雨により自然消火したといわれる。これは「高山の頂上に焚火すれば雨が降る」との伝説を迷信し、雨乞いの焚火をしたことがその原因とも考えられている（狩太町、六四――頁）。真狩村史も確証はないとしながらも、雨乞いの火が原因であると伝えられていることを記している。そしてまたつぎのように記している（真狩村、六四――頁）。

：羊蹄山の火は高処だけに最もはなやかで、火勢は七八合目を斜めたてに燃えつづけて、東京極方面へ燃えひろがつて行つたものであつた。今にして思えば畑の中に伐り横たえられたナラやタモの巨木等、それらの根株は整地のためには焼却するより外なく、そこへ笹の根や

枝木を山とつんで火は夜つびでつけ通しておいたものであるが、野良仕事の昼の過労はそれを放任してかえりみなかつたことは、いささか大胆を通りこして居つたように思えて、当時の人の吞気さが思出される。

この焚火による雨乞いについて、水によつて雨を乞う法式が長野県上水内郡戸隠村字戸隠の戸隠神社にみられる一方、「火振り」即ち、火による祈願の方法が各地におこなわれているという（本山、二三〇頁）。

北海道でも、大野土佐日記に「了徳院葬し処の塚石、今に至り如何様の日照り川干にても此石水中へ埋み一心をこらし候時は、百日の日早にても雨降らずということなし。」とある。（吉田、九頁）このことをもふくめて、つぎの説明がなされている。「知内町元町番外地に雨石神社があつた。これは雷公神社を創始した大野重一を祀つたもので、重一の死去に際し、「自分が死んだ後は、知内川の見える高台に遺体を埋め、知内川に水量の少ない時に雨乞いをしたならば、きつと雨を降らせ、鮭を沢山とれるようにしてあげたい。」と遺言を残したので、干天つづきのときは、境内の老松に御神酒、洗米、供物等を供えて酒をかけて雨乞いをした。また別に同社の御神体である大野重一の石碑を知内川に持ち出して、祭壇をかざり、前記と同様の供物をして雨乞いをしたという。」（知内町、八頁）

丹波中郡風俗問答には「当地雨乞の儀は、増長浜縁城寺にて二夜三日祈禱相成、又は京の愛宕山にて祈願相願、右祈禱の火を取に差遣し、菅村愛宕村に持上り、松明を燈し萬燈を上げ申候云々」と見えてゐる。

丹波多紀郡地方では、山上に千束柴といふものを作つて大火を焚いたり、松明を点じて行列をしたりする。山のない地方では平地で之を行ふ。其のためには近江竹生島の弁天様へ態々代表者を参詣させ、其神前の火を火繩につけて持ち帰り、これを火種とすれば一層祈願の效驗があらたかだとも信じられてゐる。

三河の吉田では、雨乞のために遠州秋葉山の火を受けて来る。一村一郷より三人か五人の代表者を出して秋葉山に詣らせ、杜僧から火を乞ひ受け、火繩に移して持帰り、水神社の辺などで一日松明を焼いて雨を祈り、又これを産土神の燈火として祈願するのである。（三河吉田領風俗問答）。

摂州能勢郡木代村鷹岡山（一名龍王寺山）では、毎年七月廿四日愛宕火と称して、此上に火を燃し雨を祈る儀式が行はれる。（摂陽群談卷三）。

八 勇別町においても兵村が山火の被災にあつてゐる（湧別町、六四二頁）。

「明治四十二年四月十五日前代未聞ノ暴風ニ際シ、偶々山火ノ飛火ヲ蒙リ、延焼シ不幸全区六戸ヲ残シテ殆ンド全滅灰燼ニ帰セリ」（『兵村誌』）の北兵村三区の兵屋一八戸（清水彦吉談）類焼記録は山火事を原因とし、この山火は北方殖民地（東部落）に延焼して、一般入殖農家も相当数類焼したと言われ、兵村罹災者は家屋の再建を行なわず他に移動してしまつた。

九 「北海道山林史」には、制札や条目が掲載されている。その最初のものはつぎのとおりである（文字の意訳がある。）。

◇ 定 （江差に建てた制札）

一、材木盗み申す者これ有らば、過料金申付くべき事

一、留山の木伐り申すまじき事

一、番所に断りなく檜皮剥き申すまじく候。附、惣て檜小木一切伐り申すまじき事

一、野火付け申すまじき事

一、廻判持参仕らざる柚は、雇い申すまじき事

右の旨相背くに於ては、急度申付くべきもの也

延宝六年二月七日

また、明治七年に「地方に『寄火入』と称え茅野・秣場等肥饒の為

猥りに野外に放火致候儀間に有え趣に相聞く、右は決して相成らざるに付、向後厳重取締るべし」と厳戒している（北海道、九〇―九八頁）。

一〇 遠別町啓明では青年会についてつぎのような記述がある。（遠別町、九〇六頁）

昭和二年四月一日、宇都火防組合として大正四年の創立以来警鐘台建立などを行なつてきたが、昭和二年四月宇都森林受護組合が発会式を挙げ火防バケツ、トビグチ、大提灯などを配付し、志水銀松氏が会長となつた。この組織は後に部落会森林部になり、警防団になつたのである。

一一 祭神は天照大御神、豊受大神であつたが、毎年火事が多かつたので、大正一二年に火の神である古峯原大明神を迎えて合祀し三祭神とした（美原、八九頁）。

第五章 開拓地

こうして焼き払つた土地には、第一次作物として菜種をまきましたが、これに當時の人たちが考案した馬上播種の方法でやつたものです。これは雨が降る頃を見計らい、さつそうと乗馬にまたがり、馬上からどんだんばらまいておくと三、四日くらいで発芽し、雪の降るころには青々とした菜種畑ができています。これが翌年の六月に見渡す限り黄色い毛せんを敷きつめたような菜の花畑です。こうして八月には反当り二

「三俵の菜種がとれたもので、これが無肥料、無耕起(注一)の略奪農法でした。

高橋寅次氏談

斜里町三井の高橋氏の懐古談である(斜里町、二四四―五頁)。農民といえば耕作と結びつくものであるが、開拓という過程では、まず、日光のあたる土地をつくるのが先決であり、耕すということとはごく簡略化されるのである。高橋氏の談話は続く。「菜種の次には第二次作物として小麦をまきます。これとても無肥料で条播きでした。そして三年目から本格的に一畝一畝ずつ血と汗の開こんがおこなわれたわけです。」(同)本格的開墾が三年目からなされたと単純に考えた場合、本来の農民の姿は三年目よりみられるのであり、それまでは拙夫の性格が強い労働を強いられたいえよう。単調で辛抱強さが要求されるものではなく、木を伐つて火をつけ、馬上から種をばらまくというきわめて爽快な一面をもつ労働である。

鶴川町史はつぎのように述べている(鶴川町、四三九頁)。

開墾当時は原始的な農業で、輪作方法なども考えず豆類・禾本科作物も連作するなどのこともあり、地力の消耗がはげしいため、開墾五年から六年で農地は極端に衰えたという。そこで農家は次々と未墾地を開墾し、地力の衰えた旧墾地は放棄することもある。

農夫が耕地を捨てて、新しい土地を開くということは、通常の場合には考えられないが、世界の農耕を見る場合、けつして奇異なものでないことがわかる。ハウエルズはドナウ農耕民についてつぎのようにのべている。「畜力を用いない耕地はやがて疲弊してゆく。原

始林は眼前に横たわっている。農地に留まつてじわじわと再び侵入してくる森林にたいし、叢林を取払つて、多収穫のために奮闘するよりは、ただ処女林の肥沃な土地の木の皮を剥ぎ、火を放つだけの方が、より簡単に要求に応えるものである。このように考えるならばこれはアメリカで“cut-gut-git” pioneering とよばれているもの予告篇である。」と述べている(Lord, pp. 110-111)。開拓の初期は、永久の土地を求める農民と別個の人格を要求する。笹を焼いての削り蒔きは「山師蒔」と呼ばれていた(若林、二五二頁)ように、きわめて野放図な農法であり、また「無断火入れ」は一樣に誰もがやらねばならなかった開拓の入門編ともいわれている(注三)(上川町、三三四頁)。

多少古い明治一九年根室県引継書は「山林に害を加ふるは野火より惨烈なるはなし本県に於て其取締の方法未だ十分ならず」と述べている(根室、一一七頁)。広い山林の各所におこる野火を少数の吏員で取締ることは至難の業であつたと思われる。

さて、上川町史は徳島県出身武市萬三郎氏の入植にふれ、氏は明治三八年渡道、上川町に入地したがまもなく病死、名則氏が尊父の遺志を継ぎ、母を親権者として、土地の貸付を出願し、五年間で開墾、明治四三年未開地無償付与の許可書がおりたことを記している(上川町、二九五頁)。入植者は開墾をはじめて五年間で目標面積の開墾を達成しなければ、その土地は付与されなかつた。そのため、移民は日夜開墾に従事したわけである。「帯を解いて寝る様を怠けものでは開墾が出来ないという話がある。」と占冠村史は述べている(占冠村、七一〇頁)。さきにもふれたが上砂川町鶉では、入植者は

山仕事になれており、また、砂川の市街が近いので炭焼きがおこなわれたが、それにより開墾の遅滞することを指導者は非常におそれた（上砂川町、六二頁）。このように経済的には、木を利用することが可能であつても、土地の無償付与のことを考えると、もつとも有効な方法で立木を処分しなければならず、拙速が尊ばれたのは当然である。火入れであろうが、山火であろうが、火が有効な手段であることに変わりはない。山火のちに開拓が進んだ例はすくなくない。

琴似町史は明治四三年春、中ノ沢付近に発生した山火事について、つぎのように述べている（札幌市、二六八―九頁）。

火勢は忽ち四方に燃えひろがり、火焰は一層風を呼んで飛火は山から山へ飛び移り、そのため盤の沢、小別沢、十二軒の一带は忽ち火の海となり、各地から応援に駆けつけた消防隊も手の下しようがなく、住民は逃げ場もなく土に穴を掘つて子供を穴にかくし、上からぬれ蓑をかぶせて自宅にふりかかる火の粉を防ぐ有様で、このため川上新蔵の住宅と橋が焼け落ちただけで、他はその災厄から無事にのがれ、一ヶ月余にわたつて燃え狂つたあとは、かえつて開拓の手助けとなり、当時の開拓の状態からすれば、この山火事は開拓協力者でさえあつたと、当時の住民はこの大きな山火事に喜ぶ者さえあつたという。

富良野市山部の浜口勘次氏は「大正二年に大きな山火事があつて、その焼跡に東山で菜種（注四）を一八俵時き何百俵とか穫つたという話を聞きました。これは落合の方から焼けて来て山がまる焼け、熊が農地へ出て来て墓地に埋葬した遺骸を掘り起して食べたあとを見たこと

がありました。」と語つておられる（山部町、五一五頁）。

大正四年から五年にかけて留辺蘂町上金華に三〇戸の愛媛県団体が移住した。ここの開墾地で大正七年出火した。移住民は入居している一二坪の着手小屋を守ることしかできなかった。しかし、これにより「約一五戸の開墾は急速に進んだ。」といわれているが、これら自ら火をつけるか、受動的に火がつくかのちがいで、結果は同じであるといえよう。（留辺蘂町、六七九―八〇頁）

このように、開墾の障害物である樹木は、大部分取除かれる対象にすぎなかつた。それが古い家を焼き払うのと同様である。開墾地は、既存の地方とは異なつた思考様式や生活様式があり、それに順応しなければ生活できなかつたのではなからうか。放火といえど重大な罪悪と考えられるが、札幌の整備のため開拓使は「御用火事（注五）」をおこなつている（札幌消防、三三―四三頁）。看視体制等の不備といふこともあり、北海道全域は内地と異つた雰囲気や瀰漫していたといえよう。明治一九年新潟県南蒲原郡の大橋一蔵らの創立した北越殖民社の開拓した南幌町夕張太の越後村について「越後村沿革小誌」は「生活は寧ろ安易なりしも、オコリの猖獗なるあり、放馬の農作を荒すあり、水害あり、脱獄囚の民家を窺うあり、前途不安なるものありしも一蔵の人格を信じて永住を決し開墾に努めたり。」と述べている（南幌町、六四頁）。

ここに依田勉三の書翰がある。これにより勉三の冷徹な目を通してみた当時の風潮を感じとることができよう。すなわち開拓地のそれをである。（大樹町、八三―四頁）

哀願書

当十勝国八年ノ四五月頃ニ至レバ輒チ満野火起リ連旬絶エズ。或ハ近ヅキ或ハ遠ザカル。当時試ミニ四方ヲ望メバ火雲天ニ揚ラザル夜ハカツテコレ無キナリ。我等移住以來十勝ノ野八年トシテ此災ヲ免ルル事ナシ唯大小広狭ノ差アルノミ。我等ソノ初ハ野火ノ起ルハ旅人ノ失火ニ因ルモノト思ヒ彼ノ鹿角拾ヒ集メノ為ニ放火スルノ説ヲ信ゼザリシガ、爾来愈々其放火説ノ確ナルヲ信ズ。

既ニ昨年ノ如キハ当緑村晩成社牧場近傍ニ於テ鹿角拾集ノ一商人土人数人ヲ率イテ山谷ニ出沒シ鹿角ヲ拾集スルコト数十駄ニシテ其際連日火絶エズ、或ハ絶エテ復起ル。為ニ当社牧場ノ一小部ヲ焼キシモ幸ニ風伯ノ穩ナリシヲ以テ大災ニ及バズ、此輩組ヲナシテ十勝國中各所ニ散在スルヲ以テ満野火トナラザルヲ得ザルナリ。而シテ本年ハ鹿角価高キヲ以テ拾集人四方ニ起ルト聞ク。復十勝一大原野ノ火烟トナラン事ヲ悲ミ併セテ一己ノ為牧場及ビ家築ノ羅災ヲオソル。依テ四月十日別紙ノ通り其保護ヲ郡衙ニ請願セリ。

四月十八九日火焰四方ニ起リ漸ク近ヅク、当時我牧場ノ母牛ノ過半ハ犢ニ乳シテ群ヲ離ルルモノ多シ。故ニ努メテ之ヲ集ム。二十一日火ハ牧場ニ入ル。牧夫之ヲ防グ。日暮レテ風起ル。故ニ牧牛ヲ驅リテ遁レ帰ル。火益々延焼シ家人睡ラズ。火愈々迫ルヲ以テ二十二日午前二時ヨリ防火ス。十時風烈シク火ハ家畜房ニ及ブ。既ニ之ヲ焼カバ秣草火トナリテ他ノ居宅建物悉ク灰燼トナラントス。是ニ於テ老幼婦女号泣シテ防火ス。幸ニ災ヲ

免ルルヲ得タリ。

二十三日尚山林焼ケテ爆竹ノ声山谷ニヒビキ其慘状ハ名状ス可ラズ。蓋シ山林ヲ損傷スルコト渺カラズ。斯ノ如ク年々野火起ラバ十勝国ハ凡テ草原トナリ樹木ノ欠乏ヲ来スハ遠キニ非ズ。

悲シマザル能ハザルナリ。聞ク山林ハ官之ヲ保護セラレ民ノ之ヲ蕃殖スルヲ勧誘セラルルト、十勝ノ山林ヲ見ル感情果シテ如何ゾヤ。而シテ我牧場ノ如キハ良好ノ小箬密生シ融雪ヨリ青草ノ発芽マデ牛好ンデ之ヲ食スルニ今ハ灰燼トナレバ復牧スベカラズ。又我社員ハ本年牛ヲ購入シ牧場ヲ拡張セントス。若シ明年モ此災ヲ再ビスルコトアラバ牛数増加スルヲ以テ牛畜ノ災厄ニ罹ルハ必然ナリ。ムシロ牧畜ヲ拡張セザルニ如カザルナリ、然レドモ官ノ民ヲ保護セラルルハ今日ノ如キニ非ルヲ信ズ。抑々十勝ノ野ハ少シク農業ヲ営ム者アルモ皆目前ノ利ニ汲々トシテ永遠ノ策ナシ。豈山林其他ヲ憂フルモノアランヤ。是ニ於テ放火スルモノ放馬スルモノ人ノ稼穡植物ヲ害スルヲ省ズ。人ノ之ヲ詰ルモ意トセズ。又衆人ノ之ヲ評スルヲ聞クニ曰ク、欲得ニ関シテハ平日ノ交際ヲ省ズシテ人ノ稼穡ヲ傷フ。不人情ト云フベシト。若シ如此人情ニノミ一任シ法令ナク豺人狼漢ハ此ノ十勝国ヲ蹂躪セバ我社ノ如ク永遠ニ牧畜ヲ事トスルモノハ小心ニ一隅ニ潜ミ人ノ情憐ヲ受ケテ災害ヲ少ウシ僅ニ此日ヲ暮サザルヲ得ザルカ。然ラバ十勝ノ野ハ豺狼ヲ養ヒテ擅ニ民羊ヲ残害セシムルトイフベシ。牧民ノ官豈袖手傍觀スベケンヤ聞ク歌ニ

あづさ弓ゆうばり山のおくまでも

おひ払ひてよひぐまをぐまを

トハ長官閣下ノ意ナリ。

嗚呼夕張山ノ奥ニアラズシテ此ノ十勝ノ沃野ニ民羊ヲ残害スルノ豺狼ニ於テオヤ。若シ閣下以上ノ陳述ハ抑揚度ニ過グルト思ヒ給ハバ願ハクハ一官ヲ当国ニ派セラレ親シク灰燼ノ中ヲ経覽セシメバ山林ノ枯稿其他思ヒ半バニ過グルモノアラシカ。又放火ヲ止ムルガ如キハ格別ノ手数ヲ要セズ容易ノ事ナルベシ。^(注六)伏シテ願ハクハ閣下山林ハ民財ニ尚一層御保護ノアラセラレン事ヲ涕泣哀願スル所ナリ

誠惶謹言

明治二十一年四月二十三日

十勝国当縁村晩成社員 依田勉三

北海道長官 岩村通俊殿

注

一 蘭越町目国内の開墾状況について、山下吉松氏は、「二町ほどきりひらき、翌年また四五反を焼いて畑にしました。火入れた年には、そのあら山にナタネのばらまきをするのですが、反に二俵もとればよい方。ナタネをとったつぎの年は、そこを手おこして大豆をまく、これも反に二俵ぐらいのもの。ムギ、イナキビ、ソバ、イモもまきました。これが主食で、米はいくらも食べませんでした。」と語られているように、ここでは無起耕は初年度だけになつてゐる（蘭越町、一〇〇—一頁）。

また、同町史は作物の種類について、「新墾地に適する作物は、大豆、小豆、菜豆、アワ、キビ、トウキビ、ソバ、ナタネ、バレイシヨ等なり、麦類は、まれに新墾に適するところありといえども、多くは茎葉のみ茂りて結実少なきをもつて、三、四年のちに作るを安全とす。」と「北海道移住のしおり」の一節を紹介している（同、八一頁）。

二 ワグナーは自給自足の農耕を土地の利用の方法によつて移動農耕いわゆる焼畑、輪作農耕（作物種類を変える輪栽ではなく土地を休閑させる方式）、永続農耕に分類している（Wagner, p. 166）。

三 無断火入れをした古老清野徳太郎氏の談話が付け加えてある。（上川町、三三四頁）

：一反五畝ほどの伐払いのあと、麦五升を播きつけて一安堵し、帰りにマッチ一本つけたところがみるみる間に燃えひろがった。この火の手をルベシベ帰りの誰かがエサウシ峠で見つけ、これを当時の中心街愛別村市街に持帰つたものか。「二十八線の沢火事だ」という密告か噂の聞き込みかで、押取刀で駆けつけたのが愛別からの森林監守であつた。幸い、消えてひどい煙もほとんど立たなくなつての現場着「やまべ釣が入つていたので、大方煙草の吸殻でも投げこんだのでなからうか」と答えて涼しい顔をしてその場を切り抜けたという。

四 この章のはじめに引用した斜里町高橋氏の談話でもわかるように、菜種は簡単に播種できたようである。斜里町では土地の付与を得るための検定のことと考えてのことと思われるが、菜種とそばなどを簡易開墾器と呼んでいるようである（斜里町、三七二頁）。同町以久科の開拓期の農業について、つぎのように記されている（同、一八四頁）。開墾当初は、麦類、馬鈴薯、豆類で一番早く採れるのは菜種であり、笹原に火をつけて焼き払つたあとに馬に乗つて種を蒔き、ちょうど花盛りに土地の成功検査が来て、文句なしに通つて部分付与を受けるという簡易開墾器ともいふべき作物であつた。開墾が遅れて

初夏になつたところは、そばを蒔いて行く方法で、菜種とそばとは開墾作物の両雄であり、石川芳次らは三十二年からこの方法で農場を拡大して行つた。

なお火入れにたいして「それも兎もすると風が出て思わず大きな地域を焼くと、その跡地が堅くなるので細心の注意を要した。」という古老の座談会の記事がある(滝上町、一五五頁)。

五 明治五年、札幌のことである。当時、開拓の成否、札幌本府経営の鍵は、失火による火災防止にかかっていた。また、開拓使の材木屋が何回も野火によつて焼失した。そして、草小屋の失火が野火となり、その野火が民家を焼いた。火気取締の布告や野火失火取締の触れを出しても危険がさらなかつたので、明治五年四月(旧暦)岩村判官は笹小屋に放火させた。これを御用火事という(札幌消防、二九一―三七頁)。

六 この書簡が契機になつたものかどうかは不明であるが、明治二二年四月、第二部次長名で網走郡長宛に次の通達が出されたという(雄武町、七八三頁)。

従来鹿角ヲ採集スルニハ、森林山野ニ火ヲ放チ雑草種木ヲ焼キ、以テ其所在ヲ明ニシテ拾収スルノ一法アルミニテ、為メニ土地ハ勿論樹木ニ傷害ヲ及ボシ、又往々幾多ノ森林ニ延焼シテ烏有ニ帰セシムルコト不少。左レバ鹿角産出ノ利益ハ以テ他物傷害ノ損失ヲ償ヒ難。

しかし、従来とて放火、失火が犯罪の対象であり、このような通達のみで放火、失火が減少するとは考えがたい。

明治一〇年開拓使は札幌農学校教頭クラークに林政上の諸問題について諮問しているが、その第一項が、「山林に関する法律の制度は、国民文化の程度に応じ寛嚴あるべきものと思われるが、何か標準となるものはないか、又森林教育を盛大にするにはどうしたらよいか。」ということであり、文化程度という点をとりあげていることは興味深い。

また、「野火予防の難きは勿論だが、大衆に知らしめる方案如何」というような質問にたいして、「北海道現下の情勢では、火器消防の方策を講じても行われまいであろう。発火したときは、係当局で人民を招集して力の及ぶ限り防火に努むべきである。」として、一〇六―一八頁)。

第六章 考察

ニニウは鶴川の川筋の谷底にあつて全く国有林の中にある。しかし焼く以外開墾の方法がないので焼いたが、その度に山火事が起つた。笹を刈るとか、火防線を入れるとかいうのでないから焼けるだけ焼けて行くのである。しかし本場の原始林はそんなに燃えるものでなく、森林に大被害を及ぼすということがなかつた。会田トクは夕張から金山経由で入地するとき、二斗の米を持つて来たが、この米を山火事で焼いた時には何のためにこの山中に来たかと思つて涙を流したということである(占冠村、七一〇頁)。

会田トク氏は二斗の米を失つて悲歎にくれたという。占冠村史の筆者は「直径三尺に及ぶ「ナラ」二尺五寸位の楸松等、巨木を惜し気もなく焼却して「ソバ」「アワ」等をとつたが、「今の計算でいくと全く「ソロバン」に合わない仕事を何年もしたわけである。」と付

記している。同書はさらに「亜麻はよく出来た。しかし陸の孤島の中から峠を越して市場に出すとき、峠の上から馬車も馬も荷物も谷底にころがし、死亡した馬まで熊にとつて行かれるときすがにつくことも出来なかつた。」（同）ともつけ加えている。十年後の豊かな生活に希望を托しても、今日の食膳にのせるものがないのである。いや食膳という言葉すら空虚に響く生活である。換金作物がよくできて、それを換金できない開拓地にすら、人びとは入地したのである。明治三〇年、愛知県より遠別原野に入植した愛知団体について、「とにかく食べ物に困難のあまり、開墾半ばにして食べ物さえあればと泣きながら去つていった人も少なくなかつたということである。」といわれている（遠別町、三八頁）。

第五章で上川町における土地の無償交付について触れたが、そこで同町史は「権利書」この三文字こそは、渡道移住の人々の誰しものが望んだ念願の文字だつたのである」と述べているが（上川町、二九五頁）、明治二九年佐渡より平取村大字荷負村に入地した名畑福松氏は「当時の人は土地を貰ふよりは少しの金を儲けたら郷里に帰るといふ考の様でした。」と語られている（日高教育会、四六頁）。

南富良野村史もつぎのように記している（南富良野村、一三一頁）。

大根をまいてある百姓のところへ、役人が通りか、つて、

「どうだお前土地がはしくないか」というので、

「そりやほしいよ」

と答えたら、木の根株の上にのぼつて、「あそこから、まで貸下げるぞ」と言つたと言う話もある位だが、その様な土地をもつて苦勞するより、山稼ぎをして今日の賃金をとるのがよろこばれた。

安住の地を求め、そのためにいかなる勞苦をもちとわぬ人びとのほかに、北海道には眼前の利益のみを求める風潮と無秩序が蔓延して

(注二)

いたといえよう。上川町の富塚慶吉氏のように「ソバやイナキビで暮らす百姓では駄目である。すくなくとも将来性のある百姓になるためには米作りをやらねばならぬ。」と水利組合の創立をもくろむ堅実な開拓者（上川町、三一四頁）を無視しようとする人々も多かつたのである。「開墾の始めごろ、父は笹焼きをしていて自分の居小屋も一緒に焼いてしまつた。」（初山別村、三六四―五頁）とか「駅まで郵便物を取りに行くのに朝飯をたいて弁当にして背負つてでかけた。うしろの方で煙がみえたが、だれかが火でも入れたんだろうと思つてでかけたが帰つてみたら自分の家が丸焼けになつていた。」（風連町、八二〇頁）というように野焼きの煙をいくぐつての開墾（上川町、二八四頁）で、第四章でのべた占冠村の山崎力太翁のようにいかに二日間の手間にすぎなくとも火の魔手から、我が身や家を守ろうとする。また、その火災は開拓者にとつて、不可避といえる状況にあり、その被害は甚大であつた。人びとは効驗灼といわれる神の存在を知つたとき、これに一縷の救いを求める気持が働くことは十分考えられる。訓子府町に秋葉神社、興部町に愛宕神社が、江別市に古峯神社（図版Ⅱ）が勧請されたのは、それらの神社の火防の神徳を敬つてなされたものである。しかし、これらの神社は、いわゆる産土神としての性格はもちあわせていないようである。そのため、町村内の小字とか特定の講員により維持されといった形態をとることが多かつたようである。そのため山火の危険は薄らいで開拓地が安定した農村に変容した今日、次第に鎮守神に配

祀されたり、消滅したりまた、その火防せ神の性格を失っている傾向がみられる。開拓の初期には、社祠や石碑の建立にいたらないまでも、より多くの人がそれらの神社の神符などをかまどの近くにはりつけていたと思われる。(図六)



図6 御門札 長瀬鎮座 宝登山神社
埼玉県秩父郡長瀬町長瀬

ここでさらに指摘しておかなければならないことは、いわゆる鎮守神・産土神・氏神の性格である。

神道にたいして、世俗的道徳的方面が強調される考えがある。藤中溪は「神道といへるは、吾日本国の大道にして、天下往として道に非ざることなし、太古異教の渡り来らざるの前は、此道自然に民間の風俗となりて、応事接物、皆神道のまゝに、尊み敬み、君臣父子夫婦の道は云ふに及ばず、日用動静、往くとして神道に非らざることなけれど……(神道正統記、神道叢説、四一七及四一八)」（加藤、四二五―八頁）という考え方は、すべて神道の世俗的方面から観察されたものである。これはとくに明治以降強調された考え方で

あるといえよう。これにたいし、このような時期においてすら、神社は宗教的一面を有していることが指摘されている（加藤、四二八―三一頁）。

北海道においては、開拓がすすむにつれて、各地に神社が創始されていった。その創始の事情は地域によつて異なるが、結局国家神道の体制に組みこまれていったようである。人びとは神社に宗教的なものを求めていても、行政機関の指導があつたであろうし、また、人びともまた、世俗的、道徳的な神社観念をもつていたから特別の抵抗を示す必要を感じなかつたのであろう。さらに、形態上は国家の祭祀をとりおこなう神社であつても、それに対して、宗教的な態度をとることをとくに排することもなかつたのであろう。音威子府村音威子府の八幡神社のはじまりについて「明治四十二年音威子府の市街北東の切割山に野地勘次郎が「開拓記念碑」と書いた木柱を立て、毎年七月二十五日付近の農家一五、六戸がこの碑の前に集まり、「お祭り」として敬神崇祖と慰安の一日を過した。」とされている（音威子府村、六六八頁）。まさに敬神崇祖が国民道徳の徳目であり、祭典が年中行事の重要な晴れの日であつた時代の、世俗的、道徳的な面のみが意識され、この文によるかぎり、いかなる神が祭られたものか、あまり意識されなかつたように思われる。結局、このような性格が産土神、鎮守神あるいは氏神と呼ばれ共同体の精神的紐帯としての役をはたすようになった。これにたいして、特定の神の恩顧を敬して神社が創祀されることがある。これを崇敬神社と呼ぶことにしよう。神社の性質上の分類としてつぎのように述べられている（神道の友、二一八頁）。

神社の鎮祭を、その性質上から凡そ分けて見ると、氏神社、産土神社、鎮守神社、若し云ひ得べくんば崇敬神社などがある。但し、今では社会的通念の上に殆んど明確な分ちはつけ難く、すべてのものが相関一体となつて居ると云つて過言でない。

として、崇敬神社をつぎのように説明している（同、二一九頁）。

仮りに崇敬神社と云つて見るが他にも少し適切な呼方がありさうである。氏族的にも地理的にも出生上にも関係がなくて勧請された神社、したがつて氏子も産子もなく、崇敬者のみに依つて奉斎されてゐる神社を、仮りに斯く申して見る。東京に於ける府社金刀比羅宮、または水天宮の如き一応斯様に見てをいてもよからう。

筆者は、前稿（梅原）において、教派神道と神社神道とを対比させて、特定の祭神を排他的に奉祀するものとそうでないものと分けて考察したが、崇敬神社と鎮守神社もそれと類似した関係にあるといえよう。崇敬神社は、とくにその祭神の恩賴を仰ぐ目的で勧請された。本居宣長が玉かつまで「古き神社どもにはいかなる神を祭れるにか、知られぬぞ多かる」（大野他、二〇六頁）と記しているが、道内各地に奉祀されたいわゆる無願社には祭神の不明確なものは少なくない。また、ここにいう崇敬神社であつても、鎮守神社に変容する（というより、その重点が一方より他方に移動する）ことがある。これは社号の変更に端的にあらわれるとみることができよう。新篠津村武田の武田神社は、かつて愛宕大権現から祭神が勧請されて愛宕神社と呼ばれていたといわれているが、同村史の写真には愛宕神社と説明がある（新篠津村、六八四頁）。これはおそらく、農場

主である勧進者の意向が忘れられ、農業を中心とする地域の鎮守神社としての性格のみが、意識されるようになったため、公式には武田神社、往昔のことを記憶しているものは愛宕神社と呼ぶこともあることを示しているものであろう。

いうまでもなく崇敬神社として鎮祭された古峯神社などは鎮守神社が地域住民全員によつて維持されたのにたいして、講などにより維持され、鎮守社とくらべて安定性を欠くこともあり、いつか産土神社に配祀されたり、消滅したりしたことが考えられる。

もう一つ、古峯神社は本社の説明でも触れたように、とくに明治以降弘布されたものである。そのため北海道においても古くから開けた道南にあまりみられず道央以北・以東にその比重がますのは当然であろう。崇敬神社の定義に、地理的にも関係がないという項目があるが、これはその土地を鎮安守護する神祇を祀る鎮守神社や各人の出生地の鎮守神社である産土神社ではないという意味であると推測され、ある神靈の神徳を求めるとき、さまざまな地理的要素が関与することは当然であろう。それは、同一地域は共通の諸条件が存在することが多いとともに、またある神祇についての同一の情報入手する機会に恵まれるということも考えられる。とくに後者について、付言するならば、古峯神社の信仰圏が、関東、東北地方という地理的分布である（栃木県、三五頁）ことでもわかるように、ある布教者あるいは布教者の組織の存在や、熱心な崇敬者で積極的な講の主唱者の存在により、地理的な分布が決定されることも多からう。このような存在により人びとは神とその神徳を知るのである。上富良野町東中一東部落の秋葉神社については、高松由平が明治三

十七年に遠洲に働きにゆき、そのとき神霊をうけてきた」と記されている（上富良野町、四三二頁）ように、なんらかの機会にその存在を知ったり、強く意識することが必要ではないかと考えられる。当別町二番川に古峯神社がある。これについて次の記載がなされている（当別町、七三一頁）。

当部落は開拓当初から月形村との交流により生活物資を求めていた関係もあつて、神社の創建も月形との関連により実現したものである。

当時月形旭町に下野国古峯原にある古峯原本社の分社として古峯神社があり、その奥殿建築費の内に二番川から寄付をした。そのお返しとして本社から二番川部落に御神璽を下付されたので、これを祀るため、坂本国蔵、山下倉市、鈴木藤治郎、佐々木善右衛門、安住兼次郎の五名が発起人となり、一九二三年（大正十二年）一月より部落寄付募集にとりかかり神社建立を図り一九二五年（大正十四年）七月落成したのである。

これは、北海道内において神社の分社が伝播した一例とみられ、地理的要素がおおいに関与しているといえよう。同時にまた、それらの神徳の存在が強く意識される時代も一要素になり得ると思われる。江別市野幌においては、大正六年頃、上と下の二箇所ではば時を同じくして古峯社が設けられ講が結ばれている（関矢、二五二頁）。これも諸要因を共有する地理的、歴史的條件が共通したことによるものと思われる。

さて、本稿においては、とくに北海道における山火の恐ろしさと、当時北海道に蔓延していた植民地気風——それを育てるもの、その

無秩序さ——などにふれ、鎮火神、防火神である秋葉神、愛宕神、古峯神の概略を述べた。これらの諸神は決して北海道においてのみ祭られるものでなく、内地においても奉祀されている。本稿は、北海道の各地でこれらの神がみが奉斎されるにいたつた要因の一部——それがとくに顕著であり共通すると思われるので——を抽出したことになる。北海道においても次第に諸条件は整備され、開拓地気風は減少してきたのは当然である。防火も山火に対するものから集落の家屋が対象になつてきた。かつて、「何戸も丸焼けになつたが、家財も少なかつたので打撃も大したことはなかつたという。」といわれた（当別町、一六六頁）ことも昔話となり、「火災は野火によるものが多かつたので、警備については森林防火組合の組織の方が、消防組よりも早かつた。」（幌延町、八〇一頁）といわれた集落内消防組織も充足されていつたのは当然のことであろう。このようにいわば山火型より集落型に防火意識の変化がみられたとしても、防火神、鎮火神の必要度が低下するわけではない。北海道の先進都市函館は、昭和九年大火に見舞われ、二四、一八六戸焼失、死者二、〇五四名の損害をうけている（函館市）。本稿は、どちらかといえば、野火山火のおこる社会的背景の解明に重点があり、現実には諸神が勧請されたそれ以外の諸要因の解明はほとんどなされなかつた。なぜ、ある村落にこれらの神社があり、別の村落にはないのか、きわめて込み入つた要因が存在するであろうが、たとえば、大正二年、天照大神と鎮火神を奉祀した訓子府村の彌生神社が、（訓子府村、一四九頁）現在消滅している（訓子府町、九八六頁）というようないふこともふくめて今後の問題として残されよう。ただ、鎮守神社

は一般に時代的影響を受けながらも、それぞれの地縁集団の消長にともなう傾向がみられるが、崇敬神社と呼ばれるものには、教派神道の諸教会と同様に、時代的社会的背景にかかわりあう複雑な要因——たとえば本宮、本部の消長や特定の崇敬者の人格など——が関与することが想像される。最後に、多くの郷土史の編纂者と同様に、開拓者のなみなみなならぬ労苦に深い感動を覚える反面、まことにもつたいないことをしたという感想を強くするとともに、開拓の焰とともに失われたものは美しい……当時は忌わしいとも感じられた……山野だけであつたろうかという思いが念頭を去来してやまない。

注

一 土地を取得するためにも乱暴な火入れがおこなわれた。南富良野村の原谷牧場で、その所有者自身が東京から現地を訪れたことについて、つぎのように記されている（南富良野村、一三五―一六頁）。

このときはるばるこの土地に來たのは、経営不振で牧場をひきあげられることになつたからである。彼は石油かんを約十かん位この牧場の山に撒いた。鹿越附近の人々を集めて約一週間に及ぶ人工山火事をつくつて牧場を丸焼にした。

青々としげつてゐる原始林を焼山にして、牧柵をつけ附近の馬を集めて成功検査に合格し、目的通り附与をとつたのである。

この様なことを書くに開拓時代は随分わるいことをしたものだと思ふ者があると思ふが、太平洋戦争中いわゆる闇取引があつたことが否定出来ない歴史である様に、その頃は常識であつた。

早川牧場の一部を水口某が所有していたが、この人も原谷牧場のこの火入の二、三日あとにやつぱり石油をまいて四方から大勢で火

を入れたが、この中に一頭の熊がいて枯れた大木に爪をたて、立つたままの姿勢で死んでいた。

初め驚いた人々も枯れた立木に火がついて、風に吹かれて焰を吹く度にじりじり焼ける熊の肉に舌づつみを打つた話は、熊の出る開墾地に明るい話題を提供したものである。

二 戦後の混乱期にも無秩序な火入れがおこなわれたようである。上砂川の状況を星俊雄氏はつぎのように語られている（上砂川町、三三四頁）。

私は、買出しも長く続かないので、畑をふやさなければと思つて、会社へ山の畑作を願ひ出た。……結局、話し合ひしたところ、赤線のある造林地帯には手をふれないように、それ以外の所なら少しぐらい畑作してもよい。火は絶対入れないようにせよ、ということであつた。しかし、これを伝え聞いた人たちは、許可を受けることなど問題外で、栓と縄で自分の地を勝手にきめて、どんどん火を入れて開墾しはじめた。見るまに山は坊主となつてしまつた。警防団はその火を消すためにしばしば出動した。範囲がひろがつて多数の人員と時間をついやして、やつと消し止めるという有様であつた。

三

幌延町史は「草分けの頃の住家は殆んど掘つ立ての草囲い草葺きで、はじめは炬を切つて焚火、ストーブが入つてからも、いまから見ると驚くほど簡略な煙筒であつた。このような状況であつたが、あまり火災はなかつた。この時代が一番恐ろしかつたのは山火であつた。開墾火入、土工火入による延焼で、このときに風などが加わると、山野一体が火の海と化し、住宅は一たまりもなく全焼してしまつた」と述べられている（幌延町、八〇〇頁）。

四

農耕の方法も耨耕より犁耕へと変わり、本格的農業経営に変わつていつた。「当時大木の切り株は畑の中にそのままになっていたが、天塩川沿岸の平地はほとんど倒れた木が取り除かれ、地面に太陽の光が直接ふりそそぎ、鍬や鎌の農耕から畜力へと変わつて行つた。」とは中川郡が独立して下名寄外一カ村戸長役場が美深に設置された、明治四〇年前半の

描写である（美深町、二一〇頁）。

五 神宮も防火、鎮火の神徳をもつものとされ、度会延佳の伊勢大神宮神異記が引抄されている（加藤、三四五―六頁。）

慶安三年十月に弘宣（詔刀師久保倉氏）下野国より常陸国水戸へ行て、大麻を賦けるに、那珂の湊と云所、屋併に、祓頂戴せしを、七百軒余の中に、たゞ一家、吾は一向宗なりとて、大麻を拒みぬる間、彼が心に任せけるに、其夜か一向宗の家より、火出で焼にけり、その一向宗は云に及ばず、那珂の湊の人、皆驚きて、太神宮不信仰の所に、たゞ、一軒火災は神罰なりとて、明朝水戸へ来て、色々懇望して、大麻頂戴し、其後は彼の一向宗の人も、太神宮信仰深くなりけると、……弘宣物語なり、大麻を拒むは、日本第一の宗廟、伊勢大神宮を軽しめ奉るなれば忽ちに神罰当りしも眞理なり、日本国に生れながら、近代は異国人のきりしたんの様に、一向宗日蓮宗のみ、伊勢大神宮を軽しめて、神恩をも不知ぞあさまし（下、ハ）

方治三年庚子に、久保倉氏が使、下野国小山と云所へ、祓賦りに行けるに、小山の上町といふ所より、火出で……三町ほど焼けるに、其町にすぐれて、伊勢信仰のもの有て申けるは、大神宮の御蔭にて、此火を消給へと、頼に頼むの間、屋に登て祓の大麻をとり、神明に誓ひて祈りけるに、左右の家は焼て、其家一つ残りけり、偏に伊勢太神宮御加護の故なるべし、其より近辺の人民まで、伊勢太神宮を彌信仰ふかくなりける（同上、一一二）。

予が少舅、三日市氏成隅、武州へ下りける折節、秩父郡吉田と云所にて、旅館の近辺より失火し……ける時、太神宮の御師の神力にて、此家を助け給へと、亭主頼に云へば……神明に誓ひて、祓の大麻をとりて、太神宮を遙拝せしに、俄に風かはりて……火は消けり、不思議の事也折に触れて神変をあらはし給ふも感応の故か（同上、一、一二）。

六 釧路市米町の巖島神社の祭神名は別表のように示される。これを一覽すると、時代の変遷にともなつて、土俗的、地方的表現が失なわれ、

表 巖島神社（釧路市米町）祭神一覽

明治五年	昭和一二年	昭和四六年
市杵島太神 阿閑大神 金刀比羅神社 熊野大神	市杵島姫命 阿寒大神 金刀比羅大神 秋葉大神 稻荷大神 猿田彦大神 海津見大神	市杵島姫命 大山祇命 金刀比羅大神 火之迦具土命 稻荷大神 猿田彦大神 海津見大神
大竜神 猿田彦尊		

明治五年は佐野の報告書、昭和一二年は巖島神社略記より（釧路市、三四一頁）。昭和四六年は北海道神社誌（二五〇頁）より。

一般化された祭神名に変わつてゆく過程がみられる。巖島神社略記に「阿寒大神ハ（大山祇命）往古ヨリ土人「アカンカモ斗」ト申シ奉リテ祭祀シアリシト伝フ」と記され、阿閑大神―阿寒大神―大山祇命と別の神号を用いるようになったことがわかる。また、昭和一二年の秋葉大神が昭和四六年には火之迦具土命と表わされたことについては、前記のものと同様の趣旨によるものであらうと想像される。昭和一二年の秋葉大神と明治五年の熊野大神について、新釧路市史には「……秋葉神社のかわりに熊野大神がある。……熊野大神も秋葉大神とともに、山の神であるが、和歌山県の熊野神社よりも地理的に近い静岡県の秋葉大神が採用されている。もともと秋葉大神は天狗信仰ともむすびつき、釧路周辺の漁村では、現在も天狗をまつているところが多いことは、秋葉大神がまつられるようになった一つの根拠になるとも考えられる。」と記されている（釧路市、三四三頁）。筆者は釧路市およびその周辺の事情については



図7 猿田彦命 一琴平神社(古平町矢字新地町)一水見喜多利氏の御好意による。

まったく未知であるが、山神信仰を共通の基盤として、天狗信仰により熊野より地理的に近い秋葉神が祭られるようになったという解釈は、いささか奇異の念を感じさせないわけでもない。天狗信仰というものも、北海道の他地域では、寡聞にして聞いていない。同社の祭神である猿田彦大神について同史は「この神は、天孫降臨のとき、天孫を高千穂に案内したことで知られているが、海の守護神とされることが多い」（同、三四一頁）と海神としてとりあげられている。他地域において猿田彦神は、同史に述べられているように、道案内の神として、祭礼の行列の先頭に立ち、そのさい天狗（図七）の装束をするのが一般的であるようである。

七 砂川市南吉野町に石橋一霊氏を会長とする古峯教会本部がある。砂川市史は、この説明にあたり、「こぶがはらさん」のこととして古峯神社に「こみね」とふりかなを付している。また江別市野幌で「こみね」という呼び方がなされている。

付 篇

教派神道とか講としての鎮火神信仰の例があるので、最後に付け加える。

栗山町継立に実行教愛宕教会がある。（藤木、三四頁）これは、昭和二年、大教正長江政六が、道庁の認可を得て神道実行教愛宕教会所を設置して布教をはじめたものである。祭神は京都の愛宕大神の分霊で、鎮火守護の大神、諸災病難を解除するといわれ広く崇拜され、信徒は一五〇―一六〇戸であったものが、昭和一〇年代には四〇〇戸を越えるまでになった。創立者の死去以降、中講義のふで夫人が教会長に就任して宣導につとめ、昭和二八年宗教法人愛宕教会を設立したものである。（栗山町、一三〇一頁）

昭和三二年、帯広市に合併された大正村の上帯広村の堀牧場では、明治四〇年から毎年一月・四月・九月・一二月の四回、秋葉講をもよおし、火災からの守護を祈願した。静岡県秋葉山からの分霊を受けての祭事であつたが、これは火事が開拓民にとつて最大の恐怖であつたからで、とくに野火は、一切の努力を空無とするだけの破壊力があり、さらに「春耕期の野焼からも発生したが、時としては山奥にはいつた漁獵者の不始末からも発生、意外な時期に意外な場所から燃えひろがつて開拓者を脅かした。」という。(帯広市、二二三頁)

大正村史のこの箇所は、二葉の写真がある。秋葉神社と大路神社と記されている。とくに説明がなされていないが、秋葉神社は秋葉講の人たちの建立したものと想像される。

大路神社についてつぎの説明がなされている。(同、二二三―二四頁)

当時(明治四四年)、上帯広で一番奥地の人家は、西一線三十一号から三十二号にかけての釜谷紋太郎、大路長太郎共同牧場(七十町歩)であつた。その日(五月一〇日)、山麓に野火がくだつてきたので、大路夫妻は一日防火につとめ、どうやら火の手が納まつたので帰宅した。疲れきつた身体でぐつすりと寝入つた頃、火はいつか住宅を包んでいた。夫妻は一たん飛びだし、たが妻は大火傷を負つて絶命、夫は残つた三人の子供を助け、火中にはいり、煙に巻かれて子供ともども焼死した。野火は一夜にして夫長太郎(四十二歳)妻ヨウ(四十歳)次女ツゲ(十七歳)次男善太郎(八歳)三女キク(三歳)の生命を奪つたのである。

その頃の野火はすさまじかつた。夜になると木々の高みにつ

いた火がイルミネーションのように輝き、そのあたりは帯広の市街より明るかつたという。大火の焰は火の粉になつて飛んだが、それよりも始末の悪いのは畑の下を走つてくる野火であつた。新墾畑は、畝を切つて枯草の付いた土が裏返しになつてゐるが、その枯草を伝わつて火が走つてくる。このような時には風が強いので、日中は野火の煙やただの土煙やら見分けがつかない。大路家が、一たん押えた筈の野火に焼かれたのは、おそらくそのためであつたろうと言われている。

大路家では、その三か月前の二月七日、母親のトラが芽室村の岩波家に手伝いにいき、そこで火災に逢つて焼死していた、しかも、当日は長女の嫁ぎ先にいたため難をまのがれた長男与一右衛門が、事件真後の六月二十一日、十七号の丸太橋から足を滑らせて折から増水中の帯広川に転落溺死をとげ、この一家七人は全滅してしまつた。この家は長女の子供が嗣ぎ、知人たちは祠を建てて一家の霊を慰めた。「大路神社」と呼んでいるのがそれである。

後記

本稿を草するにあたり、学内外の数多くの方々御協力を賜つた。愛宕神社・秋葉神社・古峯神社・寶登山神社からは貴重な資料の御送付にあずかつた。また、道内の多くの市町村、とくに月形町、幌延町、斜里町よりは多くの御教示を賜つた。知内町の滝谷吉春氏、月形町の熊谷正吉主幹、斜里町の高喜多一氏からはとくに貴重

な御意見を賜わった。また、御親切な御教示と写真を御提供下さった函館市の会田金吾氏、ころよく古平町の写真の公開を御許可下さった水見喜多利氏など、多くの方がたにこの場で感謝の意を表すことにしたい。

なお、水見氏はつぎの句を添えらばつぎの句を送られた。

悠々子

火渡りの傾むく神輿神慮とも

火渡りの火の子の浮ぶ神輿かな

文献（道内市町村史類は別項）

市川十郎

1 一九七〇「蝦夷実地検考録 箱館 尻沢部 大盛 一本木」

市立函館図書館。

2 一九七〇「同 巻九 松前」同。

内田武志・宮本常一（編）、一九七一「菅江真澄全集 一」 未来社。

梅田義彦（編）、一九七二「新訂増補 大日本神名辞書」 堀書店。

梅原達治、一九七五「北海道の出雲神社」 札大教養・女子短大紀要 七。

加藤玄智、一九三五「改訂増補 神道の宗教学的な研究」 国文館。

木村誠一、一九五七「上砂川市井史」 上砂川郷土史研究会（上砂

川町史の記述には、これによつた個所がかなりあるようである）。

衣笠安喜

1 一九六九「振袖火事」日本歴史大辞典 八、河出書房新社。

2 一九七〇「天明大火」 同七。

小館衷三、一九七三「津軽藩政時代に於ける生活と宗教」津軽書房。

斎藤茂吉、一九七三「斎藤茂吉全集 一」 岩波書店。

神道研究会（編）、一九三五「神道年鑑 昭和十一年版」弘道閣。

神道の友、一九三三「神社教典」 同 通巻九二号、双人社。

武田信一（編）、一九四二「北海道地方神社資料」郷土会。

関矢マリ子、一九七四「野幌部落史」 国書刊行会。

土屋文明他、一九七五「島木赤彦他集」 現代日本文学大系 三九、

築摩書店。

栃木県民俗資料調査団、一九六九「古峯ヶ原の民俗」 同調査報告

書 四、栃木県教育委員会。

長田武正、一九七二「日本帰化植物図鑑」 北隆館。

中村正勝、一九六四「私達の郷土 その一 二 三 合本（再）」 上磯

郷土史研究会。

古峯神社、一九七一「古峯ヶ原 創刊号」。

真鍋広済

1 一九三一「地蔵尊の研究」 磯部甲陽堂。

2 一九三二「地蔵尊講話」 永田文昌堂。

宮田登・宮本袈裟雄、一九七三「民間信仰」、中山龍淵（編）「日本

宗教大鑑」 ブディスト社。

大野晋・大久保正（編集校訂）、一九六八「本居宣長全集 一」 筑摩

書房。

物集高見・物集高量、一九七六「広文庫 一」 名著普及会。

本山桂川、一九三四「信仰民俗誌」昭和書房。

吉田靈源、一九七四（頃）「大野土佐日記」知内歴史研究シリーズ

一一、同研究会。

若林功、一九四〇「北海道農業開拓秘録」八紘学院。

渡部義顕、一九七三「小樽区史」名著出版。

Anderson, Edgar, 1967: *Plants, Man and Life*. University of California Press.

Boughey, Arthur S., 1975: *Man and the Environment*. 2nd. ed., Macmillan Publishing Co., Inc.

Chard, Chester S., 1975: *Man in Prehistory*. 2nd. ed., McGraw-Hill.

Linton- Ralph, 1958: *The Tree of Culture*. abridged by Adelin

Linton, Alfred A. Knopf, Inc. and Random House, Inc.

Lord, Russell, 1963: *The Care of the Earth*. The New American Library.

Sauer, Carl O., 1956: *The Agency of Man on the Earth in Man's Role in Changing the Face of the Earth*. vol. 1, ed. by William L.

Thomas, Jr., The University of California Press.

Wagner, Philip L., 1964: *The Human Use of the Earth*. The Free Press of Glencoe.

道史類

開拓使、一九七三「北海道志 上」歴史図書社。

北海道、一九五三「北海道山林史」。

北海道神社庁、一九七一「北海道神社誌」。

北海道庁

1 一九三六「新撰北海道史 四」。

2 一九三七「同 五」。

3 一九四〇「北海道の口碑伝説」日本教育出版社。

NHK北海道本部、一九七五「北海道地名誌」北海道教育評論社。

市町村史類（地名により配列）

愛別町、一九六九「愛別町史」。

赤平市、一九七三「赤平八十年史」。

旭川市

1 一九七一「旭川市史 五」。

2 一九七二「同 六」。

足寄町、一九七三「足寄町史」。

浦幌町、一九七一「浦幌町史」。

遠別町、一九五七「遠別町史」。

置戸町、一九五七「置戸町史」。

興部町、一九六一「興部町史」。

小樽市、一九六四「小樽市史 三」。

音威子府村、一九七六「音威子府村史」。

雄武町、一九六二「雄武町の歴史」。

上磯町、一九七五「上磯町史 年史編」。

上川町、一九六六「上川町史」。

上砂川町、一九三四「上砂川町史」。

上ノ国村、一九五六「上ノ国村史」。

上富良野町、一九六七「上富良野町史」。

狩太町、一九六〇「狩太町史」（現ニセコ町）。

釧路市、一九七二「新釧路市史 三」。

栗山町、一九七一「栗山町史」。

訓子府村、一九五一「訓子府村史」。

訓子府町、一九六七「訓子府町史」。

札幌市、一九五六「琴似町史」（現札幌市内）。

札幌市消防局、一九七一「札幌消防百年の歩み」。

篠路兵村、一九三八「篠路兵村の礎」琴似村同兵村五十年記念会（現

札幌市内）。

士別市、一九六九「士別市史」。

占冠村、一九六三「占冠村史」。

斜里町、一九七〇「斜里町史 二」。

初山別村、一九七〇「初山別村史」。

白滝村、一九七一「白滝村史」。

白石村、一九二一「白石村誌」（現札幌市内）。

知内町教育研究所、一九六八「郷土学習指導資料集 史跡篇 社会

科学研究紀要 一」。

砂川市、一九七一「砂川市史」。

大樹町、一九六九「大樹町史」。

大正村、一九六一「大正村史」（現帯広市内）帯広市。

滝上町

1 一九六二「滝上町史」。

2 一九七六「新撰滝上町史」。

多度志町、一九六五「多度志町史」（現深川市内）。

鶴居村、一九六六「鶴居村史」。

天塩町、一九七一「天塩町史」。

檜法華村、一九七六「開基百年記念檜法華村史年表」同村開基百年

記念事業推進委。

当別町、一九七二「当別町史」。

当麻町、一九七五「当麻町史」。

常呂町、一九六九「常呂町史」。

中川町、一九七五「中川町史」。

南幌町、一九六二「南幌町史」。

仁木町、一九四三「仁木町史」。

根室教育会、一九一八「根室郷土誌」。

野花南（芦別市）開基七一年記念協賛会、一九六六「七十年の歩み」。

函館区、一九三五「函館区誌」。

函館市

1 一九七四「函館市史 史料編 一」（市川十郎一や蛭子吉蔵「箱

館夜話草」などが収録されている）。

2 一九七四「市勢要覧」。

函館日日新聞社、一九三五「函館市誌」同社。

日高教育会、一九二八「日高開発功労者事蹟録」。

美深町、一九七一「美深町史 昭四六年版」。

美幌町、一九七二「美幌町史」。

福山教育会、一九七三「福山五百年史」（現松前町）名著出版。

富良野市、一九六九「富良野市史 二」。

風連町、一九六七「風連町史」。

穂別町、一九六八「穂別町史」。

幌加内村、一九五八「幌加内村史」。

幌延町、一九七四「幌延町史」。

真狩村、一九六四「真狩村史」。

松前町、一九七三「北海道の古都 松前」

丸瀬布町、一九七四「丸瀬布町史 下」。

南富良野村、一九六〇「南富良野村史」。

美原開基七十周年記念協賛会、一九六四「美原七十年史」(江別市)。

鵜川町、一九六八「鵜川町史」。

茂平沢開基八〇年記念事業協賛会、一九六九「茂平沢八〇年の歩み」

(当別町)。

山部町、一九六五「山部町史」(現富良野市)。

湧別町、一九六五「湧別町史」。

蘭越町、一九六四「蘭越町史」。

留辺蘂町、一九六四「留辺蘂町史」。

付表 北海道における防火神等分布一覽

地名はできるだけ現在の地名にしたがった。しかし、出典の古いもの等は、きわめて機械的な操作しかできなかつた。たとえば、箱館の愛宕山を函館市愛宕山としたり、雨竜郡多度志町上幌内を、多度志町が深川市と合併したため、深川市を冠してあらわした。

多くの祭神が奉斎されている場合、本稿と関係のあるもののみをあげた。

ここに記した杜祠のすべてが防火神としての神徳を認められたものとはかぎらない。そのような性格の記載が出典にみられる場合、備考欄に記した。

出典欄の頁数だけの記載は北海道神社庁発行の「北海道神社誌」、大鑑と記したものは、藤木(編)、「北海道宗教大鑑」名簿、年表の頁数を示す。町、村など記したものは該当市町村等の市史などによるほか、文献を参照のこと。

「北海道地名誌」によれば、松前町の市街北方山地と旭川市の市街東側の水田地帯愛宕神社の所在地に「愛宕」、また江差町の市街北端の海岸の愛宕神社所在地に「愛宕町」の地名がみられる。(NHK、八七、一九六、一三〇頁)旭川市以外の「愛宕」、「愛宕町」も、それぞれ松前町と江差町の該当する神社などと関係があるものと考えられる。

北海道の古峯神社（梅原達治）

社名	祭神	備考
札幌市北区屯田町 札幌市中央区伏見町 江別市野幌上 江別市野幌下 江別市美原 当別町二番川 新篠津村武田	江南神社 伏見稻荷神社 古峯神社 古峯神社 美原神社 古峯神社 武田神社（愛宕神社）	屯田兵村、武神としてか。 境内石碑、家庭防火団二〇年記念（図八） 火災が多いため、火災と盗難除け 火災が多いため、火災と盗難除け 火災が多いため 月形町の影響 農場主、愛宕山大権現から祭神勧請
函館市船見町 函館市愛宕山 函館市 函館市元町 函館市松川町 松前町 松前町北山（將軍山） 松前町字松城 松前町江良 松前町茂草 松前町大磯 松前町上川 上磯町字昭和町 上磯町当別 上磯町久根別 榎法華村字八幡町 榎法華村恵山	山上大神宮 愛宕大明神 秋葉大権現 船魂神社 神道古峯原講社 愛宕社 地藏堂 海渡山阿吽寺 八幡神社 荒神社 荒神社 荒神社 狩場神社 秋葉神社 荒神社 日本武神社 八幡神社 恵山権現	加具土神 軻遇突智命 軻遇突智命 軻遇突智命 勝軍地藏 將軍地藏 軻遇突智命 軻遇突智命 軻遇突智命 日本武尊 迦具土大命 日本セメント会社、工場の火伏せの神 元禄一五年建立 享保二年勧請、明治一九年有川大神宮の境内神社 昭四三、富浦地区秋葉稻荷神社合祀 円空立信、鉦削り、金比羅権現と三体を安置
		篠路、六 札幌市、一八二 関矢、二五二 関矢、二五二 美原、八九 当別町、七三一 新篠津村、六八四 函館日日、九〇三 函館区、七六〇 函館日日、九〇三 一七 大鑑、五 市川2 松前町、一五、道庁2、一〇 北海道庁2、一〇 一九 二〇 二一 二二 上磯郷研、六九一七〇 上磯町、三七 上磯町、四〇 榎法華村、一〇五 北海道庁3、三五

上ノ国町字上ノ国	上ノ国八幡宮	火産霊神	次項のものか	三三二
上ノ国町字上ノ国	滝廻社			
上ノ国町扇石	愛宕神社	火産霊神	火の神、八幡宮の相殿	三八一
上ノ国町桂岡	愛宕神社	火産霊神		三三二
上ノ国町北村	砂館神社	火産霊神		三三二
上ノ国町字石崎	八幡神社	荒神社		三三三
江差町相野間内	愛宕社		天文四年棟札に荒神合殿と記してある	道庁2、一一二、八八一
江差町木石町	愛宕社	火産霊神		北海道庁2、一一六
上ノ国町塩吹村	愛宕社			開拓使、三二一
厚沢部町小里部	若宮神社			上ノ国村、一八九
大成町太田	太田神社			会田私信
北松山町愛知	熱田神社	日本武尊		会田私信
小樽市入舟町	大成教小樽古峯ヶ原教会			三九
小樽市	古峰原神社	日本武尊		小樽区、四五八
黒松内町	大鳥神社			小樽市、四四五
蘭越町北尻別村鷺ノ沢	白鳥神社	日本武尊		五三
芦別市辺溪	秋葉大明神		火入れで民家が焼けたため、火の神	野花南（芦別市）、八二
砂川市南吉野	古峯教本部			砂川市、一二〇三
深川市多度志町上幌内	愛宕神社		京都嵯峨の分霊	多度志町（深川市）、六一九
栗山町御園	御園神社	日本武尊		栗山町、一二八〇
栗山町継立旧市街	実行教愛宕教会	愛宕大神分霊	鎮火守護の大神、諸災病難解除	栗山町、一三〇一
月形町旭町	古峯神社		現在せず	当別町、七三一
旭川市東旭川町愛宕	愛宕神社	可遇都知神		旭川市1、九一三
旭川市神居一条一〇丁目	神居火の神社	天照大神（主神）	火災多いため	旭川市2、四六九
旭川市東旭川町上兵村	秋葉教会		神道大和教	大鑑、五

北海道の古峯神社（梅原達治）

士別市九十九山	士別神社	古峯大神	境内石碑	士別市、一三九六
富良野市山部中央東	秋葉神社		鎮火神	富良野市、二一五九九
富良野市東山	東山神社	日本武尊	古峯神社分霊	富良野市、二一四一三
当麻町相ヶ岡	秋葉妙見社		火防鎮護、当麻神社境内社	当麻町、一〇九〇
上富良野町草分新生	古峯神社		鎮火神	上富良野町、四二五
上富良野町里仁津郷	八幡神社	秋葉総本殿 三尺坊守護所	境内石碑「秋葉山」	上富良野町、四二七
上富良野町東中一東	秋葉明神		鎮火神	上富良野町、四三二
南富良野町落合第三町内	住吉神社	日本武尊	火災等町内に不幸があつたため再建	南富良野町、七〇四―五
美深町	三社神社		古峯神社（鎮火）、美深神社境内	美深町、六三四
幌延町幌延字ウブシ	幌延神社	軻遇突智神	伊勢の神宮より分霊	幌延町、八〇一
利尻町杵形	北見富士神社	日本武尊		一〇〇
斜里町朱円東	秋葉神社	火産靈神	火の神、赤上神社に合祀	斜里町、一一〇
訓子府町緑丘	秋葉神社		現在せず	訓子府村、一四八、同町、九八六
訓子府町大島公園	彌王神社	鎮火神		訓子府村、一四九、同町、九八六
置戸町秋田	古峯神社			置戸町、四一一
常呂町隈川	隈川神社	日本武尊		常呂町、四一一
丸瀬布町七号川向い	古峯神社		昭和一五年合祀、昭和四四年白滝神社に合併さる	丸瀬布町、一一九六
白滝村奥白滝	チトカニ神社	古峯大神		白滝村、四〇〇
白滝村高台	高台神社	日本武尊		白滝村、四〇一
白滝村支湧別五線沢	昭栄神社	大山祇神	火災を受けたため	白滝村、四〇二
湧別町志撫子	志撫士神社	日本武尊	愛知団体のものか	湧別町、六〇三
興部町北興	愛宕神社		火防せ神	興部町、六七
伊達市鹿島町	秋葉神社		鹿島国足神社旧境内石碑	会田私信
帯広市大正	秋葉神社		秋葉講、火災からの守護	帯広市、二四四

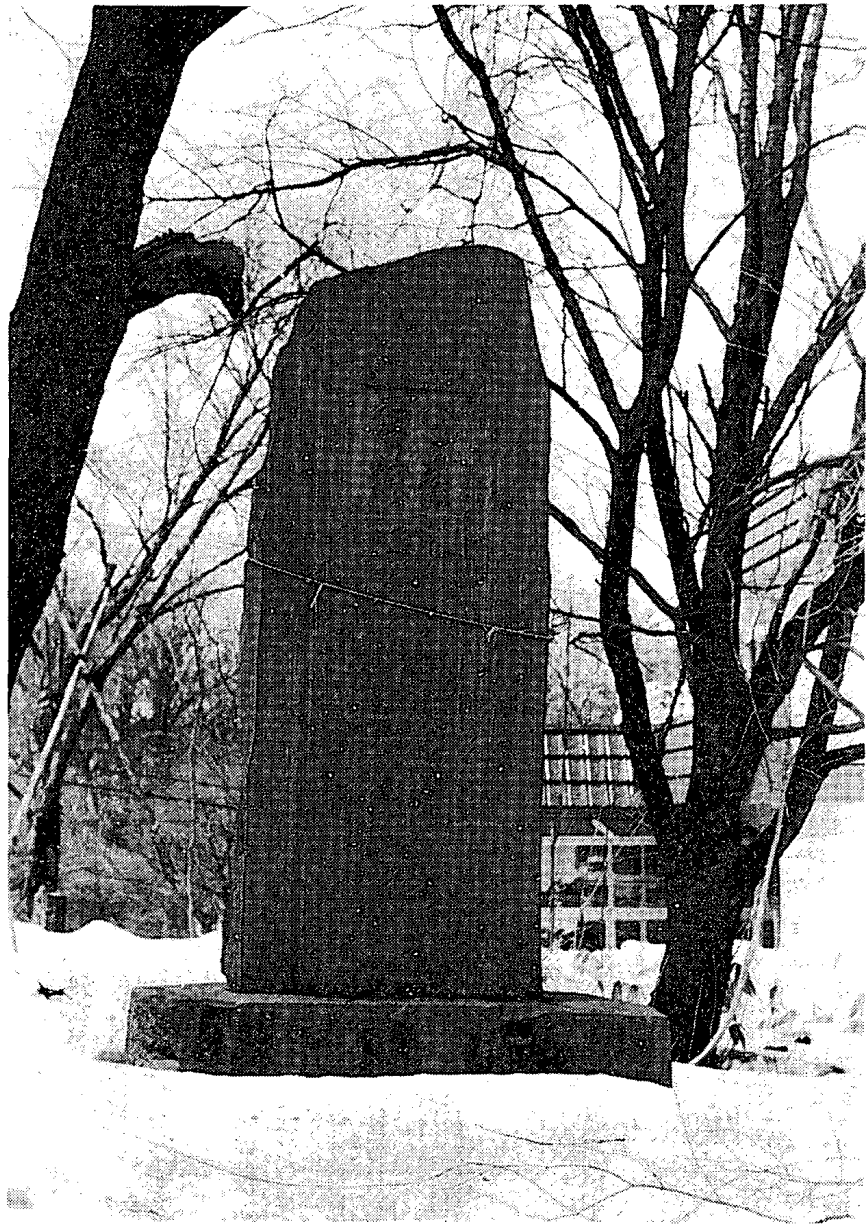


図8 火産靈神碑 一伏見稲荷神社境内（札幌市中央区伏見町）一

帯広市西六条西一二丁目 秋葉山神社
帯広市上帯広西一線三一 大路神社
帯広市川西町字八千代 正一位帯広秋葉神社

釧路市米町 厳島神社
鶴居村茂雪裡 愛宕神社

火之迦具土命

火災等で全滅した大路家の慰霊のため
新制派神社本庁
秋葉大神
郷里岩手県より勧請

帯広市、二三四
大鑑、五
釧路市、三四一
鶴居村、二五一



図版 J 神祇神名記 上 林和泉掾板行



図版Ⅱ 古峯神社 一江別市野幌7組一